

恋姫無双 黄金の獣と  
聖杯大戦

月神サチ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

では一つ、皆様私の歌劇をごらんあれ。

舞台は外史、演目は聖杯大戦。

主役は3人の男。

筋書きはありきたりかも知れぬが……。

役者がよい。至高のものが揃っている。

ゆえに、楽しめる物だと思ふよ。

さあ、我が友のために、踊れ演者たち。

まだ見ぬ未知  
結末の先を知るために、今宵も恐怖劇を始めよう……。

注意：本作はマイルド(?)な獣殿となった主人公と元穂群原のブラウニー、白き御遣い君の3人の視点で描かれるの恋姫無双のSSです。

AUOジョンソン氏をリスペクトしていますが、本人から了承は得ております。

最後に以下の内容とタグをよくご確認の上、お読みください。

- ・ガストのキャラ(と、それに似た人物)が出演しています。
- ・サージユコンチエルト、Dies irae、Fate、東方の概念が流入しています。

・獣殿のヒロイン攻略補正がぶっ壊れてる。

・三國志初期の英雄たちの(の一部の)詳細を知らないため、そこらへんの設定が曖昧

- ・作品そのものが自己満足のための闇鍋に近いので、度胸がある人だけどうぞ
- ・感想や評価が励みになるので、積極的にお願いします。
- ・北郷君は、恋姫†無双のヒロインと(ほとんど)結ばれることはありません。

# 目次

序章 白き御遣い

白き御遣い 華北に立つ

設定集

その1 | 1

プロローグ 黄金の獣

外史に現れた者 それは黄金の獣なり

21

獣と賊と | 36

獣と七次元先からの訪問者、そして

……? | 50

少女たちのどかな朝 | 70

とある少女たちとの邂逅 | 82

出会いと別れ それは二つで一つ

103

# 設定集

## その1

司馬防

イメージCV：大木 民夫

字：建公

獅子を髣髴させる白銀の髪とヒゲをもつ筋骨隆々の偉丈夫。

名門河内司馬家の現当主にして後漢の三公の一角である太尉を任されている。

良くも悪くも厳格な性格で、自分の仕事はきっちりこなし、身内に厳しいと言われている。

霊帝となる劉宏の前2代を含めた3代の皇帝に仕えており、軍部の腐敗が無かったのはこの人の功績。

でも越権行為だからって、軍部以外の不正を見逃すのはどうなんですかねえ？

一応皇帝に上奏しているが、大体十常侍に握りつぶされる。実の娘たちに厳しいが、同時に過保護な一面がある。

司馬朗

イメージCV：井ノ上奈々

字：伯達

真名：花音カノン

司馬八達の長女。

イメージとしてはアルノサージユのカノイール。

自我がやや薄い傾向があり、自分で考えて行動することは少ない。

また、暇なら三つ子の真ん中である妹に付きっ切りであることが多い。

武器は薙刀、弓を使用するが、あくまで試合という形式でしかしたことはない。

司馬懿

イメージCV：井ノ上奈々

字：伯達

真名：聆紗レイシャ

司馬八達の次女。

白銀の髪の毛のショートヘアとアツシユの瞳と、姉、妹の三つ子だけあり髪と瞳の色は同じ。

司馬家きつての才女と言われたが、病に倒れ、その際に失明してしまつてから、自信をなくして家から一步も出なくなつてしまつた。

家族に色々頼つてばかりになつてゐることを恥じてゐるらしい。

司馬孚

イメージCV：赤崎千夏

字：叔達

真名：晶シヨウ

司馬八達の三女。

姉2人と髪、瞳の色は大体同じだが、色が微妙に明るい。

3つ子の彼女たちが髪型をそろえた場合、長女と次女の区別がつかないらしいが、彼女だけ泣き黒子があるのと、デフォで髪にウェーブがかかつてゐるため、区別は容易。

8姉妹の中ではぶつちぎりの飲兵衛で、過去には酒蔵一つを空にしたという伝説を持ち、彼女にとって樽一つで駆けつけ一杯らしい。

性格は上二人に比べるとかなりほんわかしており、劉玄徳、張角と会いそうな気がする。

あれ、これ艦これのポーラじゃね？

司馬軌

イメージCV：久川綾

字：季達

真名：静蘭<sup>セイラン</sup>

司馬八達の四女。

クリームホワイトのストレートロングに蒼い双眸の女性。

まあ、鋼のリアンロードのイメージを思い浮かべれば大体合っている。

桁違いの戦闘力を誇り、運次第でラインハルト（形成位階）に膝をつかせるほどの実力者。

父がかつて隕石から作ったランスと鎧を着こなす。

絶対その隕石、ゼムリアストーンですよね？

あとこの人と、もう一人は母親が違ったりする。



司馬恂

イメージCV：茅野愛衣

字：顕達

真名：沙亜紗サーシャ

イメージは鹿島。

でも目の色は赤いのです。

献身的な性格で、甘やかすのが好きな様子。

だが残念。主人公は甘やかされるより、甘やかすほうが好きなのです。

戦闘に関しては、白蓮さんより微妙に劣るが、こう見えて隠密などの行動が得意。

司馬進

イメージCV：東城日沙子

字：恵達

真名：燐華リンカ

司馬通は双子の妹に当たる。

妹とは違い白い髪のロングヘアー。

さすが双子と言うべきか、妹と正確は良く似ており、気まぐれ猫みたいな性格をしている。

イメージはアルノサージユに出てくるネロ（ウルウリイヤ）

司馬通

イメージCV：金元寿子

字：雅達

真名：琥珀コハク

司馬八達の7番目。

司馬進は双子の姉に当たる。

白い髪の毛のショートヘアで、姉と同じ金色の瞳をしている。

プライベートでは自由人だが、仕事はきっちりこなす職人気質。

イメージは閃の奇跡に出てくるフィー・クラウゼル

司馬敏

イメージCV：野中藍

字：幼達

真名：桜花<sup>オウカ</sup>

司馬八達の末っ子。

とび色の瞳と、ウェーブのかかったブラウンのショートヘアが特徴。

イメージは『閃の奇跡』シリーズのトワ・ハーシエル。

人がよく、事務能力などが高いが、見た目から子ども扱いされることにコンプレックスを感じている。

戦闘は、弓や飛び道具を使えばそれなりに戦えるらしいが、無いと一般兵に負けるらしい。

この子と、4女だけ他6人とは別の母親がいるが、司馬建公はその理由を黙秘している。

高順

字：???

真名：水蓮

恋に恩義のある少女。

戦闘力は華雄、張遼に後れを取るが、小く中規模の集団戦の指揮官にすると真価を発揮する。

卓越した観察力、指揮能力での的確に相手の痛点を見抜き、陥落させることから「陥陣営」の異名を持つ。

司馬家末っ子2人や、香風とは気が合うと思われる。

徐庶

字：元直

真名：輝理かがり

水鏡女学院の卒業生。

イメージキャラは、零・碧の軌跡のリーシャ・マオ。

文武両道ではあるが、武の方は暗殺者向きの戦闘スタイルとなっている。

はわわ&あわわにとって、彼女のスタイルになれることを目指しているらしい。

李儒

イメージCV：田中理恵

字：文優

真名：祈荒キアラ

どこかの型月世界でテラニーした某エロ尼の角が無い姿と瓜二つの人物。

向こうと違ってこちらは比較的行動がまとも（だが、歪んだ価値観を持っていないとは言っていない）で、エロボケかますときはかます、基本突っ込み役。

董卓の父親が知り合いだったらしい。

また、董卓の洛陽に仕官のするときに再び出会い、その後賈馱と董卓を会わせたりしている。

軍事にはからつきしだが、客観的な分析などが得意であり、同時にセラピストみたいな立ち位置にいる。

なお、普段は晴耕雨読の生活と、おまけで瞑想をしているが、人脈はそれなりにあるようだ。

ここからは、少しネタばれありなキャラが出ます。

それでも構わない方は、下にスクロールしてください。

それがだめなら、たぶんオリ主やその（自称）正妻のマテリアルも駄目だと思うので、こちらから、一番下までジャンプしてください。

管輅 イメージCV:???

管理者の1人。他の管理者とは違い、南華老仙の行動方針が正しく刷り込まれている。仕事するとき以外はフリーの占い師をやっている。

その姿を正しく認識した人はいまだいない。

なお、作者もその容姿を決めかねている

南華老仙

外史世界の上位管理者にして、外史世界の統括者。

外史の記録、管理および剪定や破棄を行っているが、あるとき外史世界の座に相当す

る部分に落ちてしまい、出て来れなくなっていた。

変わりに遠隔で自身の代行を生み出したは良いが、5人中4人は独自行動を始める不始末。

(もちろんその4人は貂蟬、卑弥呼、于吉、左慈である)

あと外史に出てくる南華老仙のほとんどは、管輅が南華老仙に化けたもので、実のところ南華老仙本人ではない。

今作の不遇枠。マジで泣いていい

ここから先はオリ主とその関係者についてのマテリアルです。

見たくない人は下のジャンプから飛んでください。

一番下まで飛びます

ジャンプ!!

見たい人はこっちから飛んでください。

スクロールする手間が省けます。





主人公だけマテリアルがF a t e風で、能力名が東方風だけど、多めに見てね。

真名：南雲将臣

旧名：久我将臣

種族：半妖（覚・人間）

性別：男性

属性：秩序・悪

イメージカラー：黒

特技：分け身、寝技（意味深）、オンオフの切り替え。

能力：存在を視る程度の能力／再生する程度の能力（仮）

好きなもの：人間。

嫌いなもの：悪を悪と理解し、それを行うことに悦楽を見出す存在。

天敵：ねりこ、結衣

略歴

室町時代の公家に生まれた人物。

覚妖怪の母と人の父を持ち、腹違いの妹が半分人魚。

妖怪に恋してしまう変わり者の父を持つていたが、あるとき、父親が人外と番つていることが露見し、一族郎党討伐対象となった。

真つ先に彼と妹と共に捕まり、拷問を受け、その際に再生する程度の能力を後天的に得た。

(なお、この時点で身内は彼を残して全員死亡していたらしい)

何とかその拷問から逃げたあと、行方をくらませ、戦国時代にねりこと出会い、諸国漫遊をするはめになった。

結衣とは、江戸時代に出会ってから腐れ縁となり、昭和の終わりごろに無理やり結婚させられた。

### 人物

来る者は基本拒まない(が、それとなく遠ざけようとする)。

モットーは「巨悪を喰らう悪となれ」

基本的に善人側ではあるが、看過できない悪を滅ぼすためならば手を汚すことを厭わない側面を持つ(だから性格が悪)。

重度のシスコンを拗らせたと思われる痕跡があり、妹系の女性にお兄さん扱いされると、少しだけ対応が甘くなるのはその名残のようだ。

あと本人にそこまで自覚は無いが、料理全般でプロに引けをとらないレベルの物を作れたり、高いランクの気配遮断、変化を使えたりする。

あと、分け身はねりこ直伝らしい。

あと味覚と嗅覚に異常をきたしている。

そのため、一定の範囲を超えた味や嗅覚に関して正しく判別できない。

例：自分と華琳の料理の味が同じくらいおいしいと評価する（調味料や、食材、および調理法などで差がついているにもかかわらず）。

強すぎる香水などを嗅いでも分からない。

能力など

・再生する程度の能力（仮）

精神力依存の再生能力のため、当人の心を完全に折らない限り基本何度でも蘇る。

他の方法には細胞を一欠片も残さずに消滅させる、上位存在の権能などで存在そのものを強制的に死亡させたり消滅させるなどがある。

不完全ながら、規格外の不老不死を与えている。

・存在を視る程度の能力

右目は生物の思考と記憶を、左目は障害物を無視し見ようとする存在を視ることが出来る。

能力を使うときは、白目と中心が黒くなり、その間が黄金になる。

右目だけでもごく直近の記憶も見れるが、両目なら深層心理とある程度の記憶も一瞬で知ることが出来る。

両目を使えば未来や過去を見渡せる千里眼にもなるが、千里眼として使うと、その分再生能力を以ってしても直らない失明状態にしばらくなるらしい。

起源：支配、改造、融合、適応の複合

相手を無意識のうちに支配し、自身の一部として融合する。

また自分の身体などを改造して、それに適応することも出来る。

この力をもって、上二つの能力を肉体依存の能力から、自身の魂に対応する能力として改造した。

寧 改めリーゼイメージCV：能登麻美子

外史世界の隣にある世界に支配域をもつ神の石柱。

支配域を持つ神だけあり、俯瞰領域（つまり外史の外側など）においてはラインハルトと1対1でやりあえるほどの実力を持つが、外史の中では恋と互角程度の力しか持たない。

将として有能ではあるが、副官や切り込み隊長などのほうが適性があるらしい

結衣 イメージCV：悠木碧

南雲将臣に熱を上げている元女神。

寧の双子の姉であるが、ある理由から一時期は殺し合いし掛けたこともある。

外史では式にしたねりこを含めて破格の戦闘力を誇るが、俯瞰領域での戦闘力はそこまで高くない。

つか、女神であることを放棄した時点で俯瞰領域に存在することすら困難になった。

今作きつてのヒロインとしてのロリ枠。

冗談だろ？

ロリBB A呼ばわりすると半殺しにされる。

また、主人公の正妻を自称しており、主人公が女の子に優しくし、ただれた関係になつて彼女の折檻が行われるのが大体のお決まりらしい（ねりこ談）。

ねりこ イメージCV：MAKO

白銀の毛並み特徴である13尾の妖狐。

人のときは褐色の肌と白銀の髪、無駄にナイスボディな女性。

自称主人公の愛人。

言葉遣いがやや年寄りくさいが、別に年寄り呼ばわりされても怒らない。

もつとも、他人に年寄り扱いされるとふて腐れ、主人公にされると無言の右ストレートが腹にお見舞いされる。

符術に精通しており、大体のことは符術で何とかしようとする怠け者の節がある。

ただ、本能的に面白そうなことになる则ち多少の面倒も気にせずに行動する行動力もある。

人に振り回されるより振り回すことが多く、「なんかおきたらまずねりこ疑え」と主人公から言われるほど。

尻尾を千切るとどこかのタマモよろしく尻尾が自我を持つて勝手な行動を始めらし

い

さて、コレでオリ主たちの紹介は終わり。

だが、下までまたスクロールするのは面倒だろ？

だからこの下のリンクから飛ぶといい。

ジャンプ!!



## プロローグ 黄金の獣

### 外史に現れた者 そは黄金の獣なり

目を覚ますと、自分は森の中にある空き地で木の幹に背を預けていた。

そして空き地にはそれを二つに分けるように真ん中に池と小さな水の流れが存在した。

「……？」

何故こうなったのか、何故私はここにいいのか理解できず、疑問符だけが私の思考を埋め尽くす。

しかし、それを整理する暇はなかったようで――。

「あつ、目が覚めましたか？ マスターさん」

声のする方を向くと、そこには薄紫色の髪と、妖精を連想させる服装の少女が、心配そうにこちらを見ていた。

「……？」

何故コルキスの女王のリリイがここにいるのだろうか。

私が困惑していると、彼女はハツとして問いかけてきた。

「もしかして、先ほどその木の幹に身体を預けさせようとしたとき、私の不手際で頭をぶつけてしまったのですが、それで記憶喪失に!?」

「……いや、それはないだろう。……私の記憶が正しければ、卿とは今初めて話すのだが、間違いないかね?」

私は冷静に状況整理した後、記憶を思いだしてみたが、ここに来るより前の記憶は、違う場所だった。

もし、記憶障害ならば、彼女の宝具で何とかできるだろうし、そうでなければ彼女の話聞いて詳しいことを知らなければならぬ。

現在持っている情報は、如何せんざつくばらんすぎるからだ。

「はいっ。今初めてマスターさんとお話しました。……あつ、私としたことが、自己紹介を忘れてごめんなさい。私はサーヴァント、キャスター。メディアです。あの、よろしくお願いしますね、マスターさん」

「……」

私は、彼女の自己紹介から得られた情報に困惑していると、メディアはこちらを不安そうに見ながら問いかけてきた。

「わ、私何か悪いことしたでしょうか?」

「あ、いや……。少々混乱しててな。……卿に自己紹介させたのだ。私も名乗らねば

なるまい」

私はそう言った後に立ちあがり、続けようとした。

「私の名は——……」

まずほとんどの者が答えられる自分の名前を口にしようとしてはたと止まる。  
なぜなら答えが2つあったのだから。

一つは日ノ本の歴史の4半分相当を生きていた半妖にして、人間として生きていた男の名前。

もう一つは黄金の獣と呼ばれた水銀の蛇の友の名前。

どちらも間違いなく「私」の名前であり、それぞれの軌跡は脳裏に深く刻まれていた。  
その事実にしばらく困惑していたが、ふと池に映る自分の姿に気がついた。

私は池の傍に移動して覗き込むと、そこには軍服を纏い、黄金の双眸と髪が印象的な黄金比とも言える姿の男が映っていた。

「あの、マスターさん？」

メディアアは私の傍に近寄ってきて、私を案ずる様子で問いかけてきた。

私は軽く頭を振った後、彼女に向きあつて告げた。

「……私はラインハルト。ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒだ。ラインハルト、ハイドリヒ卿、マスター……そのあたりで呼ぶといい」

右手の白い革の手袋を取って、令呪を確認した後、彼女に右手を差し出した。

「ハイッ！ ラインハルトさんのお役に立てるよう、精一杯頑張ります!!」

満面の笑みを浮かべる彼女はそういつて私の手を取った。

「……さて、まず質問いいかね？」

「はい、大丈夫です。可能な限りお答えします」

何故か犬耳と尻尾が見える彼女に少しだけ微笑ましいものを感じながら問いかけた。

「卿が倒れている時にここに現れた、で間違いないかね？」

「はい。ラインハルトさんとのパスがありましたので、まず回復するようにいろいろしました。ですが目覚めませんでしたので、周囲に簡単な結界を張って近くを探索してきました」

私はその言葉を聞いた後、周囲をよく見てみると、何か所かを起点に結界らしきものがこの空き地に展開されていた。

「なるほど。それで、何か成果は得られたかね？」

「すみません。それなりに規模の大きい森だということくらいしか……」

しよんぼりしながら答えるメディア。

私はそつと撫でた。

「……っ？」

「それが分かったのならば、十分だ。良くやったな、メデイア」

私はそう言った後、撫でるのをやめて、池の上に意識を向けた。

すると、池の上に黄金の波紋が現れ、そこから黄金とエメラルドで作られた、船のようなものが見れる。

「……………これは……………船？」

中空に浮かぶそれを見ながら小さく首をかしげる彼女の質問に、私は優しく答えた。

「確かにこれは船だ。……………ただし、空を飛ぶ船である天翔る王の御座だがな」

私はそう告げたあと、船に乗るために階段式のタラップを先ほどと同じように黄金の波紋から出し、彼女をエスコートした。

「さて、何故私がこのようなことを出来たか、不思議に思ったはずだが……………」

私は中央の席に、そしてその隣に彼女の席を用意して座らせた後、問いかけながらそちらを見ると、彼女は目を輝かせながらこちらを見ていた。

「……………気になるようだな。少し長くなるだろうが、話を聞いてくれるかね？」

「はいっ!!」

満面の笑みを浮かべた彼女を横目に、私はヴィマーナを起動しながら、目を覚ますまでの経緯を話し始めた……………。



「事実は小説よりも奇なりとはよく言ったものだ。女神と名乗る泡沫世界の管理者相当の存在にまだ本来なら寿命があるにもかかわらず上位権限で強制的に私は殺された。それに気が付いた女神は、そのお詫びとしてこの世界……恋姫↑無双の世界に転生することとなった」

私は肩を竦めながら、語り続けた。

もちろん、天翔る王<sup>ツイマー</sup>の御座<sup>ナ</sup>の制御は忘れない。

「そのとき私が特典として要求したのは、拾った英雄王の鍵剣から英雄王の力、そしてまたま英雄王の鍵剣の傍に落ちていた聖約・運命の神槍と、そこに宿っていたラインハルト<sup>たし</sup>の残滓を取り込むことの許可を求めた……。それらの力を手に入れた結果として、私はラインハルト<sup>たし</sup>の力と記憶、レギオンを手に入れ、全盛期ならカールかつアヲトウストラ、あとごく一部の例外を除けば殴り合いで負けぬ力を手に入れたわけだ」  
私が言いたいことを言い終えた後、静かになったメディアを見ると、とても寂しそうな顔をしていた。

「……卿はよもや、自分は必要ないなど思っていないだろうか？」

「……違うんですか？」

泣く一歩手前の表情になつてゐるメデイアに対し、私は慈しみながら答える。

「当然だ。卿が持たぬ癒しの力を持つてゐる。それだけでも私にとって、卿は貴重な存在といえる。それに……」

「それに……？」

私が途中で止めた言葉に首をかしげながら問いかけるメデイア。

「……此処からは独り言だ」

「？」

「私は、ある理由から、卿のことはいろいろ知つてゐる。だからこそ、私と契約してゐる間くらいは、幸せな時間をすごしてもらいたいと思つてゐる」

「!？」

私の言葉に困惑してゐるメデイア。

私は彼女の頭を撫でながら続けた。

「ゆえに約束しよう。卿が私の元を離れぬ限り、私にできる範囲で、卿が幸せな時間を過ごせるように手をつくす、と」

「……」

撫でられていたため、下を向いていたメデイアは顔をこちらに向け、心なしか潤んだ瞳のまま問いかけてきた。

「私は、ラインハルトさんのそばにいても良いんですか？」

「卿が満足するまでいると良い」

「もし私がラインハルトさんと一生一緒に居たいと言ったら？」

「一生の確約は出来んが、卿と私が袂を分かつまでなら、共にいることを約束しよう」

「……『ラインハルトさんと結婚したい』と私が言ったら……？」

「既婚歴があり、女は駄菓子とのまたう好色さに目をつぶるならばやぶさかではない。

……が、その前に卿が受肉するために聖杯戦争に勝つ必要があるだろうな」

「……やさしいんですね」

「やさしい……か。それはわからんな。ただ言えるのは、私は総てがいとおいしいと感じていることだけだ。身内々にそれは総てに無関心の間違えだろうと指摘されたことがあるがね」

肩をすくめながら私は、答えた。

「……ラインハルトさんに一目惚れしたと、私が言ったら、ラインハルトさんはなんと云いますか？」

「その想いは嬉しく思う。美少女に好かれるのは悪い気がしないのでね。……ただ、私



が卿の白馬の王子なのかは保証しかねるが」

「……」

何かを言おうとしてこちらを向いてはためらうメデイアを横目に、私は眼下の荒野で、一人の少女と複数の賊と思われる姿を見付けた。

「……メデイア。話の続きは後だ。あの逃げている少女の方を助けるぞ」

私はそう言うと、天翔<sup>ツ</sup>る王<sup>マ</sup>の御座<sup>ナ</sup>を急降下させた……。

——\*——\*——\*

「待ちやがれっ!!」

全力で荒野を駆けるボクの背後から聞こえる野太い声に返事することなく、ボクは走る。

自衛が多少出来るといえど、複数の賊相手に戦えるだけの力は無い。

あるのは農作業でそれなりについた体力だけ……。

「——ッ!!」

しかし、何とか追いつかれずに済んでいた幸運もたまたま起きた不幸によつて終わりを迎えた。

全力で駆け続けたせいで足をもつれさせてしまったのだ。  
何とか顔から転ぶことをせずに済んだが、代わりに賊に追いつかれた。

「やつと追いついた」

「まったく、手間取らせやがって……」

「この分は体で補つてもらわないとなあ」

下種の笑みを浮かべる男たち。

じりじりと近寄る賊から少しでも距離をとろうとするが、あまり意味はなく。

もはや今の自分がただ黴りものにされるだけの存在であることを実感させられる。

そんな中、ふと何故か最近会えない母の顔が浮かんだ……。

「女を口説くのには、複数人で囲むのはいささか考え物だな」

背後から唐突に聞こえた声と共に、私の横を何かが通り過ぎて、私と賊の間の地面に刺さる。

賊は私の後ろを驚いた顔で見つめたので、思わず私も振り向いた。

そこには浮かんでいる船のような物に乗る人がいた。

その人は8尺ほどの背丈で、背まである黄金のごとき髪と瞳をしていて、見たことも

無い変わった服を着ていた。

「さて、卿らには選択肢を与えよう。大人しく此処から去るか、私に叩きのめされて去るか」

彼は浮かぶ何かから降りると、無形の重圧を放ち泰然とした態度で賊に問いかけた。

私はその範囲に入っていないのかそこまで感じるものが無かったが、賊はまるで化け物に出会ったかのように顔を蒼白にする。

「……10数えきる前に去るならば今回は殺さぬ。だが、そうでなければその地面に刺さった武具が、今度は卿らの体に刺さることになる」

その言葉と共に、彼の周囲に黄金の波紋が浮かび上がり、それぞれから剣や槍がその切っ先を賊たちに向けていた。

「1……2……3……4……」

数を数えあげるたびに増える波紋と武器。

「ちっ、新しい獲物は諦めるか。ずらかるぞ」

「ば、化け物!!」

「畜生、覚えてやがれ!!」

慌てて逃げていく賊たち。

しばらく逃げていく様を見守る彼。

見えなくなつてから少しした後、彼はこちらを向いて問いかけた。

「大丈夫かね？」

「……はい。ありがとうございます」

「何、当然のことをしただけ……。む、卿の足を怪我しているようだな」

ボクに近寄つてきた彼は私の膝を見て眉をひそめた。

「これくらいなら別に大丈夫……ッ」

立ち上がろうとしたが、左足全体に走る痛みでまた倒れそうになる。

それを彼は横からその腕を下に回してそつと支えた。

「膝の皿が割れているな。メデイア。すまぬが彼女の手当てをしてくれ」

「ハイっ!!」

その声と共に、船らしきものから、私と似た髪色の女の人が降りてきた。

……さつきはこの男の人の存在感から、気が付かなかつたのだろうか？

ボクが疑問を抱いていると、女の人はボクの膝に手を置いて何かを唱え始めた。

すると優しい光がボクの膝を包み、痛みが引いていった……。

「はい、これで大丈夫なはずです。軽く動かしてみてください」

彼女の言葉にボクはおそろるおそろる左足を動かすが、痛みを感じなかつた。

「よかつた。ちゃんと治つたみたいですね」

満面の笑みを浮かべる女の人と、私を見ながら考えるそぶりを見せる男の人に対してボクは問いかけた。

「……貴方たちは妖術使い?」

彼らの気分次第で自分の命などどうにでもできると実感していたが、それでも知りたかったことを素直に聞いてしまった。

女の人は、答えに困ってしまったのか、ボクと男の人を交互に見たり、こちらに少し引き寄せた笑いを見せる。

彼の方は特に気分を害した様子も無く、興味深そうにこちらを見ながら答える。

「卿らの理解が及ばぬもの全てを妖術と定義するならば、私も彼女も間違いなく妖術使いだろうな」

「……!?!」

男の人の言葉に女の人は目を丸くして男の人を見る。

「……ああ、そういえば自己紹介がまだだったな。私はラインハルト。ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒだ。ラインハルトと呼ぶといい。……メディアは、クラス名を名乗っておくといい」

男の人は自己紹介した後、女の人に釘を刺すようにした。

「私は、キャスターです。どうぞよろしくお願いします」

「……ボクは陳登。字は元龍。助けてくれたこと、そして怪我を治してくれたことは感謝するけど、あいにく何も返せるものがない」

「……」

ボクの言葉に2人は顔を見合わせる。

そしてラインハルトが苦笑しながら答えた。

「別に何か要求するつもりはない。……強いて言えば最寄りの邑むらか街がどこにあるか教えてくれればそれでいい」

「それなら案内するけど……」

「いや、私はあの賊を追うつもりなのでね。……あの一番偉そうな男の発言が少し気になったのが主な原因だが」

彼はそう继げたあと、踵を返そうとしたが……。

「ボクも連れて行つて！」

どこからとも無く出現させた階段のようなものに足をかけていた彼は足を止めて振り返った。

「……出会ったばかりの相手を。それも卿の言う妖術師の類のことを信じて共に賊を退治に行くとか？」

彼は目を細めて語気を強める。

「私がアレらとグルの可能性もある。もしそうでなかったとしても、卿がいたところで足手まといにしかならん。おそらく卿はただ指をくわえているだけになるだろう。……それでもついてくる気か？」

「……」

ボクが彼の言葉に静かに頷くと、ため息をついたあとと告げた。

「メディア」

「は、はい」

「賊の根城を見つけたら、しばらく天翔<sup>ツイ</sup>る王<sup>マー</sup>の御座<sup>ナ</sup>の制御を任せる。陳元龍と共に根城の周辺の上空で待機しろ」

「はいっ!!」

「……ということだ。卿も乗るといい」

彼はそういうと、こちらを向いてそういった後、船のような物に乗っていった。

「では、一緒に行きましよう!」

きやすたーと呼ばれた女の人は、そういうと、ボクの手を引いて船に乗り込んだ……。

## 獣と賊と

「……見えるというのも、考え物だな」

私は左目を抑えながら、そうつぶやきながら、眼下にある洞穴を一瞥した。

2人を乗せた後、天翔る王の御座で数分ほど移動した地点の上空に私たちは移動していた。

そこは森の中にある山のふもとで、天然の洞穴が一つ存在した。

私は振り返り、2人に告げる。

「しばらく卿らはここで待っているといい。万一がある。卿らを人質にとられると面倒だからな」

「分かりました」

「……（コクツ）」

私は二人の反応を確認した後、天翔る王の御座から飛び降りた。

自由落下で、徐々に加速していくが、宝物庫にある宝具を発動して緩やかに着地する。

「……」

私は風の流れを確認した後、洞窟の入り口にあるものを置いた……。





「なんだ、今日も収穫なしか？」

「へ、へい。すいやせん」

ヒゲ面の男に対し、傷の男はへこへここと頭を下げる。

「……まあいいだろ。あの上玉2人いるしよ」

「片方変わってますがね」

「美人には違いねえが」

ヒゲの男の周囲にいたほかの男たちがそういうと、げらげらと品の無い笑いを響かせる。

「さてと、今日もあいつらまわすとすつか」

「お頭、最近それしかしてませんか、俺たち」

「まあ、良いんじゃないか？ しばらくは食ってまわして寝る生活でも困らんしよ」

ヒゲの男たちがそういうっていつもの部屋に行こうとしたが……。

「あん？ 何だこれ」

足元に煙のような物が地面を這うように押し寄せてくる。

「おい、誰だよ入り口に火をつけた馬鹿は……。おい、ちよつと見てこい」

ヒゲの男は舌打ちすると、傷の男に命令する。

「へ、へい……。あれ」

入り口に向かおうとしたが、傷の男はそのまま倒れてしまう。

それにつられるように、他の賊たちも倒れていく。

「おい、どういう……。」

困惑しているヒゲの男もふらりと体が揺れてそのまま倒れた。

「お、お頭……。ちからがはいらねえよ……」

賊の一人の言葉に、ヒゲの男は答えられなかった。

「ふむ、神経毒の量は、まあ問題ない範囲のようだな……」

代わりに、入り口のほうから歩いてきた金髪の男が興味深そうに賊たちを見ながらそうつぶやいた。

「だ、誰だてめえ。人の根城に勝手に入り込みやがって……」

ヒゲの男が言葉を続けようとしたが、傷の男とその部下2人が割り込む。

「お、お前……!!」

「約束が違うぞ!! 今回は見逃すっていったら」

「嘘付きやがったな!」

3人の抗議を聞いた男は、首をかしげる。

「奇妙なことを。私は確かに前回卿らが悪事を行いかけたことを見逃しただろうに」  
そういつた後、彼は続けた。

「だが次にあつたときに皆殺しにしないとはいっておらんよ」

彼はそう告げると、指を鳴らす。

すると賊たちの頭上に黄金の波紋が現れ、そこから聖剣魔剣を始めとした様々な武器が顔を出す。

かれは賊たちの横を通り過ぎた後、ある部屋に繋がる扉に手をかけた。

「おい、てめえ、何するつもりだ!!」

賊の頭に対し、男は呆れた顔で答える。

「簡単なことだ。卿らを皆殺しにした後、ここにいる2人を回収する。……ただそれだけだ」

彼は扉を開くと、中から漂う匂いに顔をしかめた後、部屋に足を踏み入れた。

そして部屋の扉を閉める前に振り返る。

「では、Auf Wiedersehen Diebe」

その言葉と共に、彼らの頭上にあつた武器が射出され、同時に彼は扉を閉めたのだつた……。

—\*—\*—\*

意図的に嗅覚をカットしていなければ確実に顔をゆがめるであろう匂いが満ちた部屋の中、私の目の前には二つの牢屋があつた。

「……………ん？ 今日は一一人なのか」

その片方から、声がしたのでそちらを向くと、某良妻を名乗る狐のアルターエゴともいえるキャットが眠い目をこすりながらこちらに問いかけた。

「……………外にいる賊は皆殺しにした。卿らが望むならばこちらで保護する」

「おう、それは助かる。……………と言いたかつたが、もつと早く来て欲しかつた」

私の言葉に一瞬笑顔を見せたタママモキャットだつたが、格子で隔てられた隣の部屋を悲しげな目で見て言葉を零した。

「……」

私は隣の牢の寝台に寝かされた虚ろな目の女性を見たあと、問いかける。

「卿に聞く。彼女は卿のマスターか？」

「……正解ではあるが、はずれだ。パスこそあるが、今起きてる聖杯戦争とは関係ないのでな。サーヴァントのマスター」

眉を下げながら答えた彼女に対し、私は目を細めながら続けた。

「なるほど……。ではもう一つ。これは現在私が出せる提案だ。1つは一思いに楽にさせる。2つ目は私が一時的に保護し、自然に立ち直るのを待つか。3つ目は私の荒療治を受けさせるか……だ」

「……3つめを選んだ場合何が起きる？」

タマモキヤットは私の知識で知りうるよりも冷静に問いかけた。

「成功すればすぐにでも社会復帰できるだろう。失敗すれば程度にもよるが、立ち直るための期間が長引くようになるかもしれん」

「……」

彼女は真面目な顔でしばらく表情を硬直させた。

「だんだん眉をひそめて言った後、こちらを見つめて――」

「アタシを奴隷のようにこき使ってくれて構わない。この体を嬲り者にしようと一切文

句は言わない。だからどうかご主人だけは助けて欲しい」

土下座をした。

「……………」

私は少々驚いて硬直した後、私は自らを嗤った。

「良かろう」

私はそういつて宝物庫から絶世デユランダルの名剣を取り出して格子に穴を空けた。

「これでも着るといい」

私は宝物庫から適当な服を見繕ってタマモキヤットの傍に出現させるが、彼女は首を振る。

「アタシは魔力で編むから不要だ。……それよりこれをご主人に着せてもいいか？」

「ああ。……ついでにこつちも使え。ないよりました」

私はそういつてタマモキヤットの傍に水の入った桶とタオル数枚を出した。

その後私は扉のほうへ向いて告げる。

「綺麗にして服を着せたら言うといい。荒療治をするからな」

「無駄に紳士ぶりだが、今はそんなこと言っている場合ではないと思うが？」

私は彼女の抗議を聞いた後、ため息を付きながら振り向いた。

そしてうつろな目の彼女の傍まで移動し、タマモキヤットと共にタオルを水につけて

倒れている女性の体を清めていく。

そこで気がつく大小の傷や痣、そしてそれらが直った痕がある時間の流れを感じさせる存在の数々。

「……キャット」

「どうした、恩人」

女性にノースリーブの服を着せながら聞き返すタマモキャット。

何故このタイミングで呼称が変わったことにいささか首をかしげながら問いかけた。

「私のサーヴァントは治すことに特化している。彼女なら荒療治なしで心も体も元に戻すことが出来るだろう」

「むっ、それは朗報。では早速行くぞ」

彼女はそういうと、女性をお姫様抱っこして扉の前まで移動する。

「……恩人。扉が開けられぬ」

「……下がれ、キャット。扉の向こうはまだ麻痺毒のガスが残っているはずだからな」

私はそういつて彼女を下げると、宝物庫を開き、芭蕉扇を取り出して扉を開けるとすぐに芭蕉扇で風を起こし、同時に宝物庫から風を出してガスを総て洞窟からあらかた追い出す。

「……これはひどい。もし暇なときにこの現場を見たのなら、メイドはミタをせねばな

らなかつただろう……」

ガスが消えた後に見えた部屋の惨状を見たキャットはそう零す。

全員頭をカチ割られたり、心臓を貫かれた状態で発見されて部屋が血の海だからだ。  
(後で足も洗ってやらぬとな)

キャットの足を見てそう思いながら、私はキャットと共にその場を後にした……。



「ラインハルトさん!!」

洞窟から出ると、そこには天翔る王の御座を降りて待っている二人がいた。

「……天翔る王の御座に乗って上空で待機と言っていたはずだが……。まあいい。それよりメディアア、卿の宝具は治療に使えると記憶している。使えるかね?」

「は、はい」

彼女はそういうと、どこからとも無く短剣を取り出した。



「コルクスの女王の宝具か……。アタシのご主人を助けてくれ」

キャットはそういうと、抱きかかえていた女性をそつと下ろした。

「……あれ!? ラインハルトさん、この人サーヴァントですよ!」

短剣を使おうとしたメデアだったkが、はたと止まった後、キャットを見て混乱した様子でこちらに問いかけた。

「確かにサーヴァントだが、今回の聖杯戦争に関係は無い。とにかく治療をしてくれ」

「は、はいっ!」

私の言葉に対し素直に頷いた彼女は真剣な顔をした。

「どうか誰も傷つけぬ、傷つけられぬ世界でありますように……」  
 「<sup>ペ</sup><sup>イ</sup><sup>ン</sup><sup>ブ</sup><sup>レ</sup><sup>イ</sup><sup>カ</sup><sup>ー</sup>修補すべき全ての疵」

!」

そういつて女性の心臓に短剣を振り下ろすと、短剣が輝き、女性の体に光が移る。

そして女性の全身を包み込み、徐々に様々な傷を癒していく。

「……」

目の前で起きている出来事に呆然とする陳元龍。

そして、光が完全に消えたと、女性はゆっくりと目を開いた。

「ご主人!!」

キャットは涙をポロポロと零しながら女性に抱きついた。

「きや、キャット？ あれ、此処はどこですか……？」

彼女はサーヴァントに驚いた後、周囲を見ながら首をかしげる。

「あの、申し訳ございませんが、此処はどこなのでしょ……？」

私たちに気がついた彼女は首をかしげながら問いかける。

「陳元龍。すまぬが答えてくれるか？」

「……徐州下ヒ郡。正確に言えば豫州との境に近いはずだよ」

少し思い出すようなそぶりでも陳元龍はそう告げた。

「……そ、そうですか」

そう言葉を口にする女性。

しかし彼女の様子がおかしい。

「顔色が悪いが、何かあったのかね？」

「あ、あれ？ 私の宝具はちゃんと発動したはず……」

私の言葉に不安そうな顔をするメディア。

「だ、大丈夫です。今までの記憶が一度に流れてきたので……」

そう答えた後で続けた。

「しかし困りました。私たち、行くあても帰る家もありません」

「なら、ボクの家に来る？ 使用人でよければ仕事も用意するよ」

考えるそぶりを見せた後、陳元龍が問いかけた。

「あ、それもありがたいのですが……」

女性はこちらを見て続けた。

「そちらの方に助けていただきましたので、もしよろしければ、私の出来る範囲で恩返しをさせていただきます。こう見えてもタマモキヤットからメイドとしての技能は一通り叩き込まれていますので、炊事洗濯はお手の物です。……賊に汚された女など近くに置きたくないとおっしゃるのでしたら、諦めますが……」

彼女に対し、私は目を細めて問いかけた。

「……野宿かも知れんぞ？」

「構いません。今までの生活に比べればなんと言うことありません」

「私の気の向くまま犯されるかも知れぬぞ」

「ぜひとも汚れてしまった私の体を、貴方様の色に染めてくださいませ」

「奴隷のようにこき使うだろうな」

「生きる意味を見出せぬ私に生きる意味を与えてくださるのでしたら、大歓迎ですわ」

「……」

私は内心頭を抱えながら自問自答を始めた。

——何故此処まで好感度（？）が高い？

——あと修補すべき全ての疵ならば記憶も正常な状態に復元されるから、使わせたりしないのだが……。

——それに彼女を私は何故前にも会ったことがあると感ずるのであるか？

疑問が浮かぶが、解決することは無く溜まるだけ。

私は最終的にため息をついた。

「分かった。卿には色々私の身の回りのことをしてもらおう。ついでにそちらのタママモキヤットも来てもらえるかね。それならば離れ離れにもならぬだろう」

「!! ありがとうございます、旦那様」

「おうさつ。今後ともよろしくなので、グランドなご主人」

二人の発言を聞いて、私は突っ込みを入れた。

「キヤットの私への呼称も大概だが、そちらの卿の呼称も何故そうなった？」

「……何故か分かりませんが、そう自然と口から出ていましたので……」

女性 は 律儀 に 答えた 後、 はつ と する。

「これは失礼を。まだ自己紹介していませんでした。私は孫乾、字を公祐と申します。

そして真名を美花と言います。どうか真名でお呼びくださいませ」

「ご主人が主と認めたのだから、恩人はアタシにとつてご主人のご主人。だからこそそのグラマス。だがこれでは違う意味にとられるからグランドなご主人と呼ぶことにした。

この野生のタマモ、飼いならされた以上この身朽ちるまで犬馬の労を惜しまぬ所存である。ぜひともタマモキヤットと呼ぶと言ひ、グラントなご主人！」

主が主なら、従者も従者と言うことなのだろうか。

私が呆然としていると、同じく呆然としていたメデイアが陳元龍と話していた。

「……ど、どうしましょう。話が急転直下過ぎて、私話についていけないんですが……」

「安心して……とはいえないけど大丈夫。ボクも同じだから」

知らないうちに絆を深めている2人に少々驚いた後、私はメイドな主従に告げた。

「美花、タマモキヤット。私と共に来る卿らを、私は歓迎しよう」

こうして私は、優秀だがどこかおかしいメイドを2人仲間にするこゝとなつた……。

# 獣と七次元先からの訪問者、そして……？

5人と増えた一行は、再び天翔る王の御座に乗った後、陳元龍の案内によって、下ヒの近郊に着陸する。

そこから徒歩で1刻（約30分）ほど。

彼らは下ヒの街にたどり着いた。

「ふむ、なかなかの賑わいがある街だな」

街に入つてすぐ、視界に入った光景を見た私は、感想を素直につぶやいた。

日が傾き始めた時間帯。

それでもそれなりに人が行き来をしている。

やはり治安がいいのだろう。

私が心の中で冷静に分析していると、陳元龍が少しだけ不満げな表情を見せた。

「これでも徐州で2番目に大きい街なんだけど……」

「いや、治安が悪化しているであろうこの時世でこれだけの賑わいを見せているのだ、太

守である卿の母親の手腕はかなりのものだなと感心していた」

私がそう告げると、メディアもそれに頷く。

「私から見ても、かなり賑わいがある街だと思えました。……時代も場所も全然違うコルキスと比べるのが間違っているとは思いますが……」

少し困った様子で後半部分を零すメディアだったが、私以外は聞こえてなかったようで、困った顔になったメディアの表情に3人は首をかしげるだけだった。

「……まあ、確かに母さんはこちら辺の豪族をうまく懐柔して色々してるから、比較的治安はいいと思うよ。手段はほめられた物ではないけれどね」

少し自慢げに母親のことを紹介した陳元龍は、後半に複雑そうな表情を浮かべる。

私はとりあえず彼女を家に送り届けるために場所を聞こうとしたが……

「……カール、そこにいるのだろうか？」

背後から感じた気配に対して問いかけながら振り返った。

「[[[[[!?!]]]]」

他の4人は私の行動から慌てて振り返る。

「これはこれは獣殿。ご機嫌いかがかな？」

影絵を髣髴させるような存在がおぼろげなその人物は、私を見て問いかける。

「私は見てのとおりだ。……卿が何故ここにいるのかは分からぬが、壮健そうなのは何

よりだ」

私がそういうと、心なしか不満げな表情を我が友は浮かべる。

「……私が存在している理由について、貴方はそれとなく理解しておられると見た」

「ああ。……すまぬな、カール」

私が素直に謝ると、美花たちが目を丸くして私を見る。

が、カールは彼女たちなど相変わらず眼中に無いようで、私を見ながら答える。

「いいいえ。おかげで彼女に諸々を引き継ぐときに処理し損ねた負債について知ることが出来、それを処理するための手筈を整えることが出来たので、これはこれで悪くはない」

「……？ 黄昏の天にどのような負債を引き継がせたのかは知らんが、卿が私に腹を立てていないようで安心した」

私はカールの発言に疑問符を浮かべつつ感想を告げると、彼はいつもどおり胡散臭い笑みを浮かべた。

「……ええまあ。それはそれとして、私は今少々探している人がいるのでね。今回はこれで失礼させてもらう。また近いうちにお会いしよう」

「そうか。では、卿の探す相手が見つかることを祈ろう」

友は、私の言葉を聞くと、陽炎のように姿を揺らめかせて消え去りかけて……止まる。



「……ああ、あと一つ。私も最近気が付いたのだがこの世界は神魔霊獣の類が自然発生しているらしい。私も初めて見る状況なのでね。ゆえに万が一があるかもしれませんが。まさかありえないとは思いますが、格下の相手となめて返り討ちにされる。それだけは気を付けて頂きたい」

振り向いてこちらに告げる友のその表情は、珍しく真面目なものだった。

「なるほど。忠告感謝する」

ゆえに私も真面目に受け止める。

私の言葉を聞いた友はフツ、と笑うと陽炎のように姿を揺らめかせて消えた。

「……旦那様、今のは一体」

「私の友だ。なにやらまた暗躍しているようだが、何を考えているかまったく分からぬな」

私は美花の問いかけに対し、肩をすくめながら答える。

「ラインハルトさんも、神代の神に比肩する力を持っていますが、あの人はラインハルトさん以上の力を持っていました。あの人は一体……？」

メディアが困惑した顔でこちらを見るが、私が答える前にキャットが割り込む。

「触らぬ神に、畳ハリセン……ではなく、祟りなしだ。下手に関わるとどこぞのケルトの女王みたいな死因で死ぬことになる。というか、アタシのオリジナルの原本といい勝負

で、関わっていい相手ではない。もつとも、アレは幸か不幸か自身の自滅因子である大旦那様以外は大体塵芥と断じる類。接触は最低限に、あつてしまつたらえんがちよを忘れぬことだ。……もつといえば、大旦那様もかなり危険ではある。……地雷原でタツプダンスしている気分と言えばいいだろうか？　ちなみに地雷と言うのは踏んでも爆発はしない。踏んだ足を放すと爆発するのである。だから踏んでしまつたら動いては駄目なのだ」

キヤットの言葉に一同は首をかしげたあと、こちらを見た。

「……カールは、基本私以外には必要最低限の接触しかせぬ。ゆえにそれ以外のときに卿らから話しかけなければ、面倒ごとはまず起きぬと言つてもいいだろう。結論を言えば、好奇心でカールと関わるな、だ。あと私が危険であることは否定せん。が、逆鱗さえ触れねば大抵のことは肩をすくめる程度で赦すつもりではある」

私は真面目に答えた後、陳元龍に問いかけた。

「……さて、色々聞きたいだろうが、此処では色々と人目が多い。ゆえに卿の家に上からせてもらいたいのだが……」

「分かった。ボクも助けてもらつたお礼がしたかつたから。……ついてきて」  
そういうと、彼女は私たちを先導し始めた……。



日がそれなりに傾くなか、私たちは陳元龍の家と思われる比較的大きな屋敷に到着した。

「ここがボクたちの家だ。遠慮しないで上がって」

そういつて私たちを彼女が招き入れる。

するといきなり玄関に誰かが全力でやって来て、残像を残す早さで土下座した。

「申し訳ございません、喜雨！ 勝手に困っている人を助けて家に上げてしまいました  
!!」

「……どういふことか詳しく説明して、紅美鈴」

陳元龍がそう言うのと、その誰かはすぐさま気をつけの体勢になる。

そこで明らかになったその人は……。

青みがかった灰色の瞳と、側頭部だけそれぞれ三つ編みにした背まであるストレートの紅の髪。

服装は淡い緑色で華人服とチャイナドレスを足して2で割ったような感じのもので、

同色の帽子と、帽子についている『龍』とかかれた星型の飾りを見て確信する。

(……紅魔館の門番)

のちにそう呼ばれるであろう彼女は、弁解をし始める。

「えつとですね。その二人、街にいた悪漢を伸してくれたんですが、その時いくつか家の壁に穴空けてしまいまして……。弁償しようにもお金がないので困っていたので、喜雨の名義で建て替えました。そうしたら、建て替えてもらった分は働いて返すといわれたので、連れてきたんです」

指先をツンツンしながら答える紅美鈴。

「……分かった。とりあえずこちらの客人をしばらく別の客間でもてなしてて。ボクはそっちの人と話しあいしておくから」

「は、はいっ!!」

陳元龍はそう言うと、その場を後にした。

「えつと、ではこちらにどうぞ。私ができうる限りおもてなしいたします」  
心なしか緊張している紅美鈴の後に、私たちは続いた……。

「えっと、ではお茶をお持ちしますので——」

「それには及ばん」

客室に案内されたあと、紅美鈴がそのまま去ろうとしたので、それを止めた。

そして私は宝物庫から玉露の茶が入った茶器を出す。

「それよりも、少し卿が気になったのでな。話をしたい」

すると心なしか緊張の色を見せる彼女。

「……私で良ければ」

そういつて彼女はお茶のあるあいた席に座る。

「単刀直入に言おう。卿は何者かね。唯人にしては気配が一線を画しているが」

「——ッ!!」

体を硬直させる紅美鈴。

「案ずるな。どちらかといえは私もそちら側の存在だ。証拠は今見せたとおりだ。もっ

とも、私はもともと人間だったがね」

「……他言無用に出来ますか?」

恐る恐ると言った具合に問いかける彼女。

「無論。キャスターと、キャットも私同様に正体を秘匿するべき存在なのでね。その点  
はわきまえている。それに同胞ともいえる卿をわざわざ売るほど切迫した理由は無い」

「……私は紅美鈴。龍と人の両方の血を受け継ぐ化外です。貴方たちが一緒に来た喜雨  
の母、燈に恩があるので、彼女が居ない間屋敷を守っています」

「なるほどな。……すまぬが、私たちの自己紹介は少し待ってくれ。もうすぐ卿がつれ  
てきた者と共に陳元龍が来るからな」

「……どうしたの、2人とも」

「……？」

「……？」

「私は冷静に廊下に居る二人に対して告げる。  
私はキャスターも卿らと積極的に事を構えるつもりはない。安心できぬならばサ  
ヴァントは霊体化して構わぬぞ」

「!?!」

「だが、屋敷の主を困らせるのはあまりよい物と思えぬゆえ、あまり躊躇するならば発言  
を翻すかもしれん」

「……」

少しすると、陳元龍の背後から一人の少女がおどおどしながら顔を出した。

もう一人は澄んだ水を思わせる色の双眸と、ライトブラウンの背まである長い髪の少女。

「……よもや、このようなところで、卿と出会うとはな……」

私がそういうと、少女は目を丸くする。

「貴方は、私を知っているんですか？」

「ああ。もつとも、私が卿と共にすごし、卿の悲願を達成するために尽力した端末であるかは保障できんがね。——イオナサル・ククルル・プリシエール。……いや、結城寧」

「!!」

「……卿は何故この世界に来た？」

私が問いかけると、彼女は私たちを見たあと、答える。

「私は、神様と名乗る女の人に、ラインハルトって人を助けて欲しい、と言われました。貴方の力が、彼が集めきれなかった最後の鍵だから。貴女を助けた彼を、今度は貴女が助けて欲しいって。最初は信じられなかったけど、色々証拠を見せてもらって、私は信じることにしました」

（私を、助ける……？ 集めきれなかった、最後の鍵……？）

そのとき、私の中で限りなく確信に近い仮説が浮かび上がるが、それを後回しにして、彼女の話しの続きを聞く。

「だから、私はこの世界に来ました。そうしたら、左手の甲に赤いこれが浮かび上がって、サーヴァントを召喚したんです」

「……なるほどな。色々気になるところはあるが、あの女神が何らかの理由で私の協力者として卿をこの世界に誘い、降り立った直後にサーヴァントを召喚したということは分かった」

「!? つてことは……」

「私は、ラインハルト。ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒだ」

驚くイオナサルに対し、私が冷静に答える。

「ちよつと待って」

陳元龍が思いっきり話の腰を折る。

「とりあえず話を整理しよう。そっちの2人も座って」

すると、霊体化していたサーヴァントが姿を現す。

後ろだけひとまとめにした赤いシヨートヘアーの女性。

ラウンドシールドと、剣を持ち、やや露出が多いのが印象的だ。

そんな彼女は、イオナサルの隣の席に座る。

陳元龍も席に着き、私に問いかけた。

「貴方は大陸の外から来たといったけど、アレは嘘なの？」



「大陸の外から来たな。それは間違いない」

「この世界って言ったけど、アレはどういうこと? あの違いが正しければ、世界は一つだけじゃないってことになるんだけど」

「……回答を拒否する」

私がそういうと、何か言いたげな顔をした後、続ける。

「貴方とイオナサルの関係は?」

「彼女が本当に私の知る彼女ならば、夫婦と言うことになる」

「「!?!」」

私の発言に、イオナサルは急に顔を赤くして頭から湯気を出し始め、美花、メディア、美鈴が頬を赤く染める。

ついでにキヤットが、

「仕えた当日に第一シユラバヤ海戦勃発とは、なんともまあ女たらしな大旦那様だ。……いつ後ろから刺されるかトトカルチョするのも面白いかもしれぬな」

とつぶやいていたが、それはスルーする。

「なら次。キヤスターと、ライダーは、両方とも、サーヴァント、つて言った。これは一体どういうこと?」

「回答を拒否しよう」

「……じゃあ、今回はこれで最後にする。貴方は大陸で何をしようとしているのか、貴方は何者なのか。そしてそちらのキャスターが何者なのか。答えられる限り、答えて」

「二つ目は未定。強いて言えば諸国漫遊か、侠客の真似事だ。二つ目は人であり、人ではない何か。……現状は人類に仇なす者ではない。最後の質問については、回答を控えさせてもらう」

私はそう告げた後、陳元龍に問いかけた。

「この中で、私を知らぬ者がいるのでな、自己紹介をしても良いかね？」

「あつ、そうか……なら双方自己紹介して」

彼女は今更ながらハツとして、自己紹介を促した。

「私はラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ。友からは獣殿、部下からはハイドリヒ卿などと呼ばれていた者だ。呼び方は、相当奇妙な物で無ければ、特に文句を言うつもりは無い」

「私はキャスターです。ラインハルトさんのサーヴァントです。よろしく願います」

「私は孫乾。字を公祐と申します。旦那様に賊から助けをいただきましたので、そのご恩をこの身朽ちるまでお仕えることでお返ししようと考えています」

「アタシはタマモキャット。今は首輪付きのメイドだワン。ご主人とともに賊から救つ

てもらい、ご主人を廃人から復帰させてくれた大旦那様とそのサーヴァントに恩返しするために犬馬の労を自主的に行うフォックスなのである」

私たちが自己紹介すると、イオナサルと、ライダーが自己紹介する。

「私はイオナサル・ククルル・プリシエール。イオンって呼んでください。えっと、ライオンハルトさんとは……ふ、夫婦で、です」

「あたしはライダー。イオンのサーヴァントよ。……でもまあ、まさかマスターの探し人がこんなに早く見つかるとはね……」

恥らう主に、驚きと困惑を見せる従者という、どこか噛み合う主従の自己紹介が終わると、どこからとも無く、空腹を告げる音が2人分鳴る。

「~~~~」

どうやらイオナサルと、美花らしい。

「つと、もうそんな時間か」

ふと外を見る陳元龍。完全に日が暮れようとしていた。

「美鈴。手伝って」

「は、はいっ!!」

椅子から降りた陳元龍は美鈴と共に部屋を出る。

「あ、私もお手伝いします」

「アタシも手伝うぞ。メイドの料理をご覧に入れよう」

その後続くメイド2名。

「あ、私も作りたい料理があるんです!! ライダーは待つてて!!」

そういつて彼女たちの後を追いかけるイオン。

「えっと、私たちは……」

困惑した顔のメディアに対し、私は告げる。

「客人として、私の従者としてもなされておくといい。それに厨房はおそらく5人で十分。それ以上はかえって場所の関係で作業が滞る可能性すらある。ついでに私の話し相手も欲しいからな」

「は、はい……」

しばらくの沈黙の後、彼女は何か決心した様子で問いかける。

「あ、あの。イオンちゃんとの馴れ初めとか、聞いてもいいですか!」

「あ、あたしもそれ気になるな」

ライダーも興味津々で口を挟む。

「……それは、数奇な出会いからだったな……」

私は暇つぶしとばかりに、昔語りをはじめた……。



「お待ちせいたしました」

「おまたせ。はいっ、貴方が食べてみたかった好きです♪やきにくだよっ」

「タマモキヤット特性オムライスだ。ご主人と大旦那様用の分も、勿論あるぞ」

「なんか、あの3人に負けてるけど……」

「私たちも作らせてもらいました」

それぞれが料理を用意する。

美花、陳元龍、美鈴が作ったのは、この大陸の料理。

キヤットは、オムライス。

そしてイオンは私が以前食べたいと言っていた好きです♪やきにく。

「……では、いただきます。頂きます」

「「「「いただきます!!」」」」



「さて、この部屋割りはおかしい」

(若干私の分だけ量がおかしかった気がする) 食事の後、料理の後片付けをする美鈴を横目に、私たちはそれぞれの部屋に案内されたのだが、美花、キャット、イオン、ライダー、メイドアが私と同室で、屋敷で一番大きい部屋に割り当てられていたのだ。

「……えっ? イオンは貴方の妻だし、孫公祐とキャットはメイド。それでライダーとイオンは一緒にいないとだめみたいだし、同じ理由でキャスターも外せない。ならこれが妥当じゃない?」

陳元龍の発言に対し、私は申し出る。

「部屋割りは、私とキャスターで一つ、美花とキャットで一つ、イオンとライダーは一つ。それで頼む」

「……あんまり部屋汚さないでね」

ジト目でこちらを見る陳元龍。

「汚れた分は取り替えておく」

「このようなやり取りがあつて、部屋が割り振られた。

……が。

「何故やつてきた」

キャット、ライダーを除く全員が入室し、一応監視と言うことで、部屋の外にライダーとキャットが立つことになっているらしい。

彼女たちの発言に若干頭が痛くなりながら、問いかけた。

「イオン。夫婦であり、ようやく出会えたからと言って、いきなり初夜をすることはないのでぞ?」

「い、今しないと、け、決心が鈍りそうだから!! それに、出会ったら端末越しじゃ出来なかったこと、色々するって決めてたから」

生まれたての小鹿を髣髴させる雰囲気をかもしながら、彼女はそう告げた。

私はその決意を是とし、それ以上言及するのをやめる。

「キャスター。私で本当にいいのか?」

「ラインハルトさんから召喚されたときから、一目ぼれでした!! それに、私と袂を分かつまで、ずっと居てくれると、私が幸せになるために助力を惜しまないと言つてくださりました。私にそれを信じさせてください」

(私と話すとき終始頬を赤く染めていたが、まさかそこまで思っていたとはな。)  
彼女の決意は固く、おそらく断ればそれこそ人間不信が本格化してしまいそうだった。

これを断る理由も特でない。

「……美花は……言うまでも無いのか」

「はい。今宵、旦那様の寵愛を受けるつもり参りましたので。それに、初めてのお2人が安心できますように、手本をお見せいたしませんと……」

(……いきなり40だが、まあ、今の体の小手調べには申し分ないか)

私はそう思った後、3人に告げる。

「ならば今宵、私の無聊を慰める楽器となれ。私は総てを愛している。ゆえに卿らも愛しているよ。我が腕の中で夜の静けさに負けぬよう、その美しい声で快樂の音色を奏でておくれ。——さあ、今宵は互いの熱に、溺れるとしよう……」

そしてそれぞれと口付けを交わす。

それはほんの小鳥が啄ばむようなささやかな物だったが、少女たちの体に熱を持たせるには、十分すぎる甘美な毒だったようだ……。

私はイオンをその腕に抱いてそつと寝台に下ろす。

すると、メディアと美花がイオンの両側にそつと座った……。



結果だけいえば、私は朝日を寝ることなく拝み、3人は安らかに寝ていたとだけ残しておこう。

それにしても、陳元龍の母親は、ずっと太守として働いているのだろうか……？  
そんな疑問を朝日を拝みながら私は考えるのだった……。

## 少女たちのどかな朝

「……で。……ター、起きて。マスター！朝だよ、起きて」

水の中から、浮かび上がるような感覚と一緒に、私は目を覚ました。

目を開くと、そこには私を覗き込むライダーの顔があった。

「おはよう、ねぼすけさん。ご飯もうすぐ出来るから体拭いて、服着替えようね」

ライダーはそういうと、手馴れた様子で傍の机に置いてあった桶から、浸してあったタオルをとって絞り、私の体を拭き始めた。

そこでようやく、私は昨日のことを思い出して顔が熱くなる。

その間にも、ライダーは手馴れた様子で私の体をきれいにしていく。

「……お母さんみたい」

その様子を見ていた私が思わず言うと、ライダーはきよとんとした顔をしたあと、笑顔で答えた。

「それはあながち間違えじゃないかな。だってあたし、一応2人の子供育てた経験あるし」

「……えっ?」

思っても見なかった答えに、私は驚く。

すると、ライダーはぼつが悪そうな顔をした。

「あく、そっか。聖杯戦争と、サーヴァントについては教えたけど、あたし自身についてはまったく触れてなかったからね」

「真名が露見すると不利になることが多いから、だっけ？」

私が数日前のことを思い出しながら問いかけると、彼女はこくり、と頷いた。

「そうそう。あたしはただでさえサーヴァントとしては微妙なのに、真名が露見するとさらに不利になるからね。……もつとも、貴方の旦那さんはあたしの真名を知ってたけど」

「ライニさん、すごいな……」

私がそうつぶやいてると、ライダーが告げた。

「はい、体は綺麗にしたから、後は服だけ……」

ライダーは少し困った様子で、昨日には無かったクローゼットを開けて問いかけた。

「彼が貴方のために用意したらいいんだけど、どれが良い？」

私はライダーの隣まで歩いてクローゼットを見ると……。

そこには、私があの人と一緒にいるときに作った服のほとんどが並んでいた。

「ポーラーズメモリーからⅢに、メモリア、ブルーミングヤード、ハピネスウエットに

リンカーゼンまで……」

私は目を丸くしたあと、クローゼットの前に立ち、一つ一つを確かめる。

そのあと、下の引き出しを見ると、下着もすっかり揃っていた。

「なんか下着のほうは、『……英雄王の宝物庫は、際限ないな』とか遠い目をしながらあの波紋から取り出してたけど……サイズ大丈夫？」

少し心配そうに私を見るライダーを横目に、タグなどを見ると……。

「……びつたり」

いつも着てるものと同じサイズの物だった。

その事実になんか困惑していると、ドアがノックされた。

『私だ。ライダー、イオンは起きてるかね？』

ノックした後すぐに扉を開けることはせず、ラインハルトさんは扉越しに声をかけた。

「おきてるけど、着替え中だから入っちゃ駄目」

ライダーがそういうと、

『分かった。……朝食もできて、みんな揃ってるゆえ、気持ち急いでくれると助かると返してくれた。』

ふとライダーを見ると、ライダーが小声で話した。

「(流石にまだ恥ずかしいでしょ?)」

「(あ、ありがとう。ライダー)」

私は慌てて下着を着て、着慣れたポーラーズメモリーⅢを着て、部屋を出る。

そこには後ろ髪を束ね、テレビで高級レストランとかで見るシェフの格好をしているラインハルトさんが立っていた。

「……」

私たちがその姿に驚いていると、ラインハルトさんが首をかしげた。

少しした後、彼は自分の服を見てどこか納得した表情を見せる。

「……この姿は変かね?」

「そんなことないです。むしろ、すごく似合ってます!」

私がそういうと、彼は一瞬驚いた顔をしてから、口元に笑みを浮かべた。

「そうか。……では行こう」

彼はそういうと、私たちを先導した……。

— \* — \* — \*

「あ、イオンさん、ライダーさん、おはようございます」

部屋に入つてすぐに気がついたのは美鈴さん。

「……アレ？ ラインハルトさんは？」

首をかしげる陳登ちゃん。

「なんか気になることがあるつて言つてどつか行つちやつた。でもすぐ戻るつて行つたから、大丈夫だと思ふけど」

ライダーが私の代わりに答えてくれた。

「なら、大丈夫だと思います。あ、早く食べないとラインハルトさんが作つてくれたサンドイッチがなくなりそうですよ」

キャスターがそういつて少なくなっている（と思われる）大皿を指差す。

「クッキング得意な大旦那様に料理で負けて、微妙に猫まつしぐらでブルーな気持ちである」

「旦那様の御手を煩わせてしまったのは申し訳ないです」

ラインハルトさんに色々させてしまったことと、料理の腕で負けた（？）ことで凹んでいるキャットと美花さん。

しかし、愚痴を出したら二人とももきゅもきゅとサンドイッチを食べ始めた。

私はライダーと並んで空いた席に座って、サンドイッチを一切れ自分の皿に取り、食べた。

「……山菜とベーコン、あと卵のサンドだ」

山菜とベーコンの対比、そしてそれを引き立てつつも喧嘩しないようにしている卵。

「……あたしの料理がかすんで見えるくらいおいしいんだけど」

困惑しながらつぶやいたのはライダー。

すると、背後から扉が開く音と共に声がした。

「そうなのかね？ 私には違いは分かんが、卿がそういうのならば、きつとそうなのだろうな」

振り向くとそこには軍服姿に戻ってるラインハルトさんが立っていた。

「どこに行つてたの？」

私が問いかけると、彼は普通に答えた。

「見るからに不審な人物が居たので、追ひ払つておいた。あと、この家の家主と出会つて軽く挨拶をした」

彼がそういつて一歩横によけると、そこには陳登ちゃんと同じ髪色の女性と、紳士っぽい服装をした男の人が立っていた。

「……母さん、森脇さん。お帰りなさい」

「お、お帰りなさい。燈、森脇さん」

陳元龍さんと、美鈴さんが2人に挨拶すると、二人も返事を返した。

「ただいま」

「ああ、ただいま、喜雨君、美鈴君」

紳士っぽい人は、2人に挨拶したあと、問いかけた。

「それで、彼女らは一体どなたかね？ 彼に聞いてみたけれど、はぐらかされてしまつてね」

すると陳登ちゃんが答えた。

「彼はラインハルト。隣の邑から帰る途中で賊に教われたボクを助けてくれたんだ」

「よろしく」

ラインハルトさんの挨拶を聞いたあと、陳登ちゃんはキャスターさんを示して続けた。

「彼女はキャスター。彼のサーヴァント」

「は、はじめまして」

「……やはりか」

陳登ちゃんの言葉に、なにか納得したそぶりを見せる紳士さん。

その言葉に、女性のほうも表情を強張らせる。



「ただ、あの人は自然体で二人に告げた。

「案ずるな。卿が聖杯戦争に介入しなければ、私も卿らを害するまねはしない。卿らが参加した聖杯戦争ではないのだからな」

「その通りだぞ、ヴィランのコンサルタント。アタシたちが参加した聖杯戦争は原因不明の収束で決着はついている。猫をも殺す好奇心さえださねば目下の問題は乱世だけだ」

キャットの援護（？）も言葉を聞いた紳士さんは考えるそぶりを見せた後に答えた。

「私としてはこちらに危害が来ないなら何も言うつもりはない。つと、私としたことが自己紹介もせずに人のことを聞いてしまったね」

彼はそういうと、優雅に一礼した後、続けた。

「私は森脇。本名は別にあるのだが、訳アリでね、森脇と呼んでくれたまえ」

すると女性も挨拶した。

「私は陳珪。字を漢瑜と申します。娘を助けてくださり、ありがとうございます」

母親と、その知人（？）の自己紹介を確認した陳登ちゃんは、紹介を再開した。

「そつちの侍女服の2人は孫乾とキャット。ラインハルトさんがボクを襲った賊の根城から助け出した人だ」

「名を孫乾、字を公祐と申します。ラインハルト様に忠誠を誓う、しがないメイドでござ

います」

「アタシはタマモキヤット。ご主人と共に大旦那様に従う首輪つきのメイドである。ちなみにそちらのMrダンディと同じ元サーヴァントだったりする」

二人の自己紹介が終わると、美鈴さんがバトンを引き継いだ。

「それで、こちらの2人がイオンとライダーです。先日悪漢を伸してくれた方です」

「い、イオナサルといえます。よろしくお願いします」

「あたしはライダー。よろしく」

「さて、自己紹介もすんだところで……」

森脇さんがわざとらしくせきをしてそういった後、私たちの席にあるサンドイッチを見た。

「私たちも食事をもらえたらありがたいのだがね」

するとラインハルトさんは頷いた。

「無論、歓迎しよう。私はいにく英霊よりも便利な体を持っているのでね、一食抜いても問題ない上、もともと多めに作ってあるのでね」

ラインハルトさんはそういつて指を鳴らすと、空いてる席の前に、私たちが使っている食器と同じ物が一式ずつ現れた。

「!？」

「ほう……」

私と陳珪さんは驚いて、森脇さんは興味深そうに食器を見た。

「では、座ると良い」

彼はそういつて、2人の椅子を引いて座らせた。

そして彼は自分の座った席あと、私たちを見守るように見つめ始めた。

「やはりパンか。しかも味も申し分ないものだね」

サンドイッチを食べて感想を述べた森脇さん。

そのあとラインハルトさんに問いかけた。

「パンなんてどこから持ってきたのかね？」

「訳あってこれをもっているからな」

ラインハルトさんが見せたのは……。

「……テーブルクロス？」

ライダーが首をかしげながら、彼が持っている物を見る。

「北欧の昔話にある、北風のテーブルかけ。その原典だ」

「ほう、あの有名なテーブルかけか」

「えっ、うそ。それ本物？」

森脇さんが関心を示し、ライダーは胡散臭そうにそれを見た。

「……といっても、私が出したのは、それぞれの食材と調味料だけだがね」  
彼はそういって、テーブルかけを自分の前のスペースにかけた。

『テーブルかけよ、おいしいライ麦パンを一つだしてくれ』

彼がそういうとポン、という音と共にそのテーブルかけの上にライ麦パンが一つ現れた。

「「「「「!?」」」」」

その光景に私を含めたほぼ全員が目を丸くした。

「……もつとも、私は食材を出すことにしか使うつもりは無い。料理人を徒に路頭へ迷わせる趣味は無いのでね」

彼はそういうと、出したパンを食べ始めた。

「旦那様、一つご質問よろしいでしょうか?」

「……なにかね?」

美花さんの問いかけに、彼は首をかしげた。

「旦那様は今後どのような予定なのででしょうか」

「……今のところは未定だが、洛陽に行こうと思っている」

ラインハルトさんが答えると、森脇さんが口を挟んだ。

「今の洛陽はお勧めしないよ。なにせ私腹を肥やすことに腐心する役人と、搾取される

平民しか居ないからね」

「なに、その状況をかき回すのも一興だろう」

「……私も歳かな。そういう面白そうなことに首を突っ込もうとしなくなっていたようだ」

なんだか哀愁の念を纏い始めた森脇さん。

「とりあえず、数日は此処で世話になりたい。無論、何らかの形で礼はするつもりだ。構わぬかね？」

彼は陳珪さんと陳登ちゃん、そして森脇さんと美鈴さんに問いかけた。

「私は構いません。どうぞゆるりとおくつろぎくださいませ」

「ボクも構わない。それに、色々聞いてみたいこともある」

妖艶な笑みを浮かべる陳珪さんと、興味を示す陳登ちゃん。

「私としては、家主兼マスターの意見に異論はないね」

「私もありません」

森脇さんも美鈴さんも、滞在することを了解してくれたようだ。

「そうか。……ならばその言葉に甘えるでしょう」

彼はそういつて、ライ麦パンを食べ始めた……。

## とある少女たちとの邂逅

ひとまず朝食を終えた私たち。

あとは各自のんびりとするはずだったのだが……。

「陳珪様！ 森脇様!! 一大事でございませう！」

そういつて食堂に駆け込んだのは兵士と思われる男。

「なんだね、騒がしい」

冷静な教授の言葉に、兵士が大声で返答した。

「申し上げます！ 西の邑で怪異が現れました!!」

「それで、種類は？」

陳漢瑜が問いかけると、兵士は即座に答えた。

「村の者によると巨大な肉塊だったとのこと」

「……ならまあ何とかなるか」

森脇教授はそういつて立ち上がった。

「……教授。怪異とやらはどういうものかね」

私が問いかけると、彼は一度首をかしげた後に納得した様子で説明を始めた。

「怪異とは、一言で言えば意思を持つ幻想だ。人間の理解が及ばぬ存在の総称でもある。ただし、怪異といつても実はその生態から2種類に分類できる」

彼はそういつて人差し指を立てる。

「二つは片方は夜に現れ、朝日と共に姿を消すモノ。さしずめ夜の住人といえれば良いだろう。日の光の下に生きる人間をねたむ亡霊や、どちらかと言うとポルターガイストに近い存在で、大体その場で倒したとしても次の夜には大抵復活するし、そもそも神秘のこもらない方法では対処すまらず出来ないのが特徴だ。他にも幾つか特徴があるがまた今度にしよう」

続けて彼は2本めの指を立てた。

「もう一つはこうやって日中でも突然現れる化け物。出現頻度はそこまで高くはないが、時間体帯の影響を受けることなく存在し続ける。唯一の救いは個体にもよるけど、一般兵10人居ればなんとか倒せるし、一度倒してしまえば復活はしない。同種こそ居ても、同一個体は居ないみたいだからね」

そういつてから、彼は顎に手を当てた。

「二つに共通するのは、大体人間を襲うと言うことだ。……中には友好的だったり、そもそも人間に興味すらないのも居るけれど、それは少数派だ。前者は仲間として引きずり込むために、後者は自分の糧にして成長するために人間を襲う」

彼は途中である人物を一瞬だけ見たあとに私のほうを向いて説明を続けた。

そしてそれが終わると、手をパンツと鳴らして告げた。

「とりあえず怪異についての説明は以上だ。私は怪異の対処に向かうけれど、君はどうするかね？」

「無論同行させてもらおう。なに、肩慣らしには丁度良い」

私はそういった後、イオンたちに問いかけた。

「卿らはどうする？ 留守番でも問題ないぞ」

すると美花がいの一番に答える。

「旦那様のいらっしやるところが私の居るべき場所。ならば何故同行しないと言う選択肢がありますでしょうか」

「メイドたるもの常に瀟洒に主の傍に侍るべし。と言うわけでご主人が同行するならばもれなくお得なセットでキャットが付いてくるのである」

美花の答えにキャットが続く。

「私ももちろんついていくからね!!」

「マスターの護衛は私がちゃんとするから大丈夫」

「後方支援はお任せください!!」

イオン、ライダー、メディアがそう続ける。



すると教授が陳元龍と陳漢瑜、美鈴に問いかけた。

「では私と彼らは確定として、君たちはどうするかね？」

「私は城に戻るわ。邑から逃げてきた人たちの対応をする必要があるはずだから」

「ボクは家に残しておくよ。昨日の一件で少し疲れたからね」

「私は家で掃除や洗濯をして皆さんのお帰りをお待ちします」

それぞれの回答を聞いて頷いた教授は兵士のほうに向けて告げた。

「では馬を4頭用意しておいてくれたまえ。こちら準備が出来次第向かう」

「はっ!!」

兵士は短く返事して去っていった。

「……と一言で支度は早くしてネ!!」

——\*——\*——\*

急ぎ支度をした私たち（といっても、持ち物を確認する程度）は、私とメデア、イオンとライダー、美花とキャット、そして教授の4組に分かれて馬に乗って隣の村まで

駆けた。

しかし……。

「これはひどい……」

「完全に1から作り直したほうが早いレベルの惨状だな。しかも村の中心部でまだなにやら戦っている」

私はそういいながら飛んできた弾幕を私は即席で発動させた防御壁で防ぐ。

「……おかしいね。兵士の連絡ではあの肉塊みたいな怪異が現れたと聞いていたが……」

教授の独り言に対し、私は周囲を見渡してあるものを見つける。

「どうやらその肉塊の怪異は既に死んでいるようだ。……イオンたちは見ないほうが良い」

私が指し示すところにはモザイク待ったなしの状態になっている元肉塊型の怪異の死体があつた。

「……私ではあの二人は止められない。すまないが君にあの2人をとめてもらいたいのだが、出来るかね？」

「無論。キャスターは後方支援と流れ弾対策に防御の維持を頼む。後美花とキャット、教授とライダーは周辺に逃げ送れたものが居ないか確認だけしてくれ。イオンはいつ

でも詩魔法でキャストと共に援護が出来るようにしておけ。灯台守の夜ならば発動できるはずだ」

「はいっ!!」

「かしこまりました」

「がってんだワン」

「了解」

「分かった!!」

私は彼女たちの意思を確認したらそのまま防壁から飛び出す。

すると片方から極太レーザーが放たれた。

私は即座にそれを回避する。

するともう一人のほうの声が上がった。

「誰だか知らないけど、早く逃げて! 私の力を弾くやつにかなうわけが無いわ!!」

「ならば余計に加勢せねばならぬだろう」

私はそういって、私に背を向けている金色の髪の娘の隣に立ち、目の前に居る若草色の髪の少女と正対する。

「……あら、ずいぶんと倒しがいがいいそうなのが出来たわね」

少女は好戦的な光を瞳に宿しながら、そう零した。

「貴方!! 私のいったことが聞こえたでしょ!? 理解できなかったの!」

弾幕をばら撒きながら後退する娘に対し、私は言葉を返す。

「ああ。理解したうえで卿に加勢している。彼女は暴走しているが、卿では足止めが精一杯。ゆえに前衛を私が受け持とう。卿は後衛で各場所から弾幕をばら撒け」

「何を勝手な——」

彼女は痺れを切らしたのか、こちらを向いて抗議をしようとしたが、その瞬間少女が娘に襲い掛かった。

が、目の前の出来事を無視する私ではないので……。

振りかざされた傘を左腕で受け止める。

「あら、思ったより丈夫ね?」

「あいにく、丈夫さは私の自慢でねっ」

私は容赦なく右ストレートを振るうが、避けられる。

そして彼女はそのまま私の腹に一撃を加えると同時に間合いを開く。

が、私はその一撃を無視してそのまま殴りかかる。

流石にそれを予想していなかったのか、彼女は驚いた顔でそのまま鳩尾に一撃を喰らった。

それにより彼女は体をくの字に曲げる。

「……む。案外弱いな」

私がそういったとたん、彼女が獐猛な笑みを浮かべて殴りかかってくる。

それに対し私は口元に笑みを浮かべてその拳を殴りつける。

すると鈍い音共に、少女の拳が碎ける。

「——ッ!!」

彼女は即座にバックステップで距離をとり、私たちに向かって傘を向ける。

すると極光が視界を白く染めた。

が、その光がやんだ後、私が平然と佇んでいるのを見て、少女は目を見開いた。

「私の攻撃が……効いていない……?」

私はすかさず肉薄、彼女の傘を叩き落とし、そのまま首を掴む。

もちろん抵抗をされるが、私には無意味だ。

「さて……どうするべきだろうか」

私は少しだけ普段抑えている威圧感を出しながら、問いかけるように少女を見つつそ

う零した。

すると徐々に瞳から戦意や怒りなどの渦巻くものが消えていき、代わりに恐怖の色が

滲み出した。

それと同時に私の手を離そうとする手も徐々に震えた物となる。

私はしばらくその成り行きを観察した後、少々乱雑に頸から手を離れた。当然少女は落下し、そのまま咳き込む音が響く。

「ちよつと！ そいつまだ生きてるわよ!？」

先ほどの娘が怒りながら文句を言ってきた。

「案ずるな。痛みのおかげで我に返ったようだからな」

私の言葉に少女が反応する。

「ええ。おかげさまで」

立ち上がって私たちに見せた少女の表情は、痛みでゆがめられていた。

「さて、何があったか聞こう。内容次第では私の監視下と言う条件付きで引導だけは渡

されぬように交渉する」

「……信じて良いのかしら」

やや疑いのまなざしで私を見る少女。

「ああ。でなければ私がとうに引導を渡している」

私がそういうと、彼女はぼつぼつと語りだした。

「あの気色悪いやつが、私のお気に入りだった村の傍の花畑を原型なくなるまで踏み荒らしているの見たら、カッとなつて……。そのあと怒りに任せてそいつボコボコにしたら、今度はそいつがなんか攻撃してきたから反撃したわ。あとは、貴方がきて……。今に

至るわ」

「なるほどな」

私はそういつた後、付け加える。

「……ああ、言い忘れていたが卿も頭数に入っているからな」

私がついでに金髪の娘に対してそういうと、娘が目を丸くしてから問い返した。

「何で私まで!?!」

「卿も怪異であるのだろうか？ あと個人的に気になることがあつてな。手元に置いてお

きたいというのものもある」

すると娘が自分の体を抱えるようなリアクションと共に一歩下がった。

「私にへんなことする気でしょ!?! 艶本みたいに! 艶本みたいに!?!」

「……あいにく、私には恋人も妻も居る。ゆえに恋人でもない女に手をかける意味は無

い」

私は若干頭痛を感じながら、娘の言葉を否定した。

「嘘よ。人間の男なんて私みたいな可愛い女の子見たら見境無く襲ってくるんだから

!!」

「ちなみにそれは経験則?」

娘のトンデモ発言に痛みを忘れていいのか少女が呆れに似た表情を浮かべながら問

いかけた。

すると娘は挙動不審になりながら答えた。

「え、ええ。そうよ。私何度も襲われたわ」

「……」

「……」

「な、何よ」

私たちが無言であることに違和感を感じたらしい娘。

「とりあえず卿らは私の監視下に入ることだ。——構わんな。教授」

私がそういつて振り返ると、そこには教授たちが居た。

「まあ、構わんよ。最初に邑を襲った肉塊型の暴走と云うことで処理しておくさ。……ただここまですごく壊されたら、復興とか色々かかるんだよね」

そういつてこちらに視線を合わせたので私は答える。

「分かった。補填のほうは宝物庫の財をいくらか見繕おう。木材と鉄などの金属で構わんかね？」

私の答えを聴いて満足そうにする。

「良いとも。細かいところは後で話をつめよう。……とりあえずそちらの2人の名前を聞かせてもらえるかな？」



すると2人とも硬直する。

「あー、もしかしてどっちも名前が無いのかな？」

教授がそういうと、2人とも頷いた。

「……とりあえず君がパパツとつけて」

教授がめんどくさそうにそういつたので、私は金髪の娘の肩に手を乗せた後に告げる。

「卿の名は八雲紫だ。姓は八雲、名は紫。異論は認めん」

すると少女はきよとんとした顔をした後、自分の名を反芻した。

「……八雲、紫……八雲紫。まあ、悪くないわね」

そうつぶやいた彼女を横目に、私は少女のほうを向いて告げる。

「それで卿の名は風見幽香だ。姓は風見、名は幽香」

「風見幽香。なかなか良いわね」

うれしそうに少女は自分の名前を評価した。

「名前も決まったようだし、一応自己紹介してくれるかな？」

教授がそういうと、2人は幽雅に自己紹介をする。

「私は八雲紫よ。この人になんてかわからないけれど目をつけられたみたい」

「私は風見幽香。よろしくね」

二人の自己紹介の後、私も自己紹介する。

「私はラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒだ。ラインハルトとでもハイドリヒとでも好きに呼ぶと良い」

私を皮切りにメディアア、イオン、ライダー、美花、キャット、教授と自己紹介がされた。

「……それで、君はどうして彼女たちを庇護下に置こうとしてるのかな？」

教授がそう問いかけてきたので、私は答える。

「八雲紫は面白い力を持っていたから。風見幽香は最低でも精神面での矯正せずに野放しにしていれば。いずれ人の敵として討たれるだろう。私はそれを見過ごせなかっただけだ」

「なるほどね」

「……ああそうだ。念のための仮契約をしておくか」

私はそういつて宝物庫から魔法の杖を取り出して地面を杖でつつく。  
すると私の周りに魔法陣が浮かび上がる。

驚く一同を無視して私はやや強引に八雲紫を魔法陣に引き入れて、そのまま口づけをした。

「[[[?]]」

一同が驚愕し、紫が状況把握できないまま硬直している間に、魔法陣の色が変化する。それを確認した私は紫から離れる。

すると魔法陣の中心から二枚のカードが現れ、それと同時に魔法陣は消滅した。

私は宙に静止するそのカードの片方を手に入れた後、紫に告げる。

「これで卿は私の従者として仮契約した。これでどこに居ようと何をしていようと一方的に私が卿を呼び出すことが出来る。ちなみに今宙に浮かんでいるもう一枚は従者用で、なくすと従者が色々大変なことになるゆえ、大事にしておくことだな」

「そんなことよりいきなり何するのよ!!」

我に返った紫が猛抗議を始める。

「私の庇護下にあるということは、卿らが起こした諸々は私の責任になると言うことだ。ならばどうして首輪を付けずに野放しにするとと思う?」

「まあ、妥当だよ。契約方法がアレだけど」

教授が一部非難しつつも賛同してくれた。

すると幽香も問いかけてきた。

「あら、なら私ともするのかしら?」

「ああ」

私は紫に従者用のカードを渡しながら頷くと、イオンたちが不満そうな顔をする。

「……卿らも仮契約するかね？」

私が問いかけると、イオンたちは首を立てに振った。

するとキャットが何故か前に歩み出てきた。

「アタシの見立てが正しければ、大旦那様の今の術は完全に独自に編み出した契約系統の魔術。ただ、その効果を考えると、複数契約した場合、術者は生半可な力量では耐えられないはず。……先の戦闘と言い、大旦那様はただの人間とは思えない。……一体どんなナマモノなのだ？」

「英雄王の持つ無限ともいえる宝物を包含した宝物庫を持っていた時点で気になってはいたけれど……。確かに君は規格外だ。私も出来れば色々聞きたいね」

キャットに続いて教授にもそういわれたので、私は簡単に答えることとした。

「英雄王の宝具についてだが、現時点では黙秘させてもらう。代わりに私について話そう」

私は一度区切ってから、一同の態度を見る。

いずれも好奇心などあれど、不思議と恐怖の色は見えなかった。

それを少しだけ驚きながら続けた。

「私はある2人の存在がわけあつて融合した存在だ。片方は人と人ならざるものの中に生まれた者。もう1人は今のこの姿であるラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイ

ドリヒ。どちらも常軌を逸脱した力を持つていた。が、一応人として生を受け、人として育てられた。だから人ならざるものである怪異を全て排すべき存在とみなないし、常人を逸脱した力を持つていようと人とともに生きていた」

私はもう一度区切つて続けた。

「ゆえに私を拒絶する者を私は否定しない。私はいつの世も迫害され、それでもなお人と共に歩もうとした人間好きで半端者だからな」

私がそういう終わると、美花が真つ先に口火を切つた。

「旦那様が何者であろうと、私にとつては些事に過ぎません。私にとつて重要なのは、旦那様が私を助けてくださったという、私が私の全てを捧げるに値する事実だけです」

「ご主人の狂信ぶりに冗談抜きで困惑するキャットではあるが、野生の掟を破るつもりも無いのでご主人とお別れは当分先だ。あと旦那様とはいい酒が飲めそうで何よりなキャットであった」

何でここまで忠誠心振り切つてるのか分からない美花と相変わらず独特な理論を展開したキャットの言葉を聞いたイオンたちも自分の思いを告げだした。

「あなたはちよつとエッチだけど、優しいし、私のために色々なことをしてくれた。今度私が貴方の傍にいて、出来ることで少しづつお返しをするつて決めてるんだから!! 拒絶なんて……悲しいこと、言わないでよ……」

「神代に生きていた私にとって、人間とそうでない者の恋愛なんてよくある話ですから。私は拒絶なんてしませんよ。むしろ私のほうが拒絶されないか心配なくらいですし」

「あたしからは特に言わないよ。まだであつて二日目だし。……でも君が他人に対して誠実であろうとしてるのは分かるから。私は信用してるよ」

イオンが悲しげに、メディアはホツとしたような表情で、ライダーは真面目な顔でそう告げた。

「私は特に何も言わないさ。というかそれ言い出したら美鈴君の肩身狭くなってしまう。それに私自身は人間だろうとそうでなかりとあんまり関係ないからネ」

「あの出鱈目な強さの理由がわかって私はホツとしてるわ」

「……紫に同じく」

教授、紫、幽香の3人も自身の思いを告げてくれた。

「……もの好きだな」

私はそう零した後、告げる。

「では幽香、イオンたちと仮契約をする。……キャスター、卿とはパスがあるのだから良いだろうに」

「なにか、不平等な気がします!!」

メディアの反論を聞いた私は、答えた。

「分かった。だが幽香が先だ」

「あら、別に私は後でいいわよ?」

痛みがぶり返したのか、少し声が強張っている幽香。

「仮契約をすれば私の魔力で卿の傷の回復が早まるからな」

私はそういつて魔法陣を展開し、幽香にこちらへ来るように促す。

「……口付けは、流石に少し恥ずかしいのだけれど」

私を見たあと、頬を少し赤く染めてそっぽを向いて幽香はそういつた。

「他の方法はこれの数十倍時間がかかるのでな。我慢してもらおう」

私はそういつて彼女のあごをそつと指で触り、こちらに顔を向けさせる。

「や、やさしくお願い」

私は彼女の恥らう表情に少し驚いた後、頷いて仮契約を行った。

すると幽香が少し戸惑った様子を見せる。

「……すごい。痛みがもうほとんど無い……」

自分の体調の変化に驚く幽香。

事実彼女の拳は既にパツと見では違和感が無く、既に普通に動かしていた。

そして美花、イオン、メディアの3人とも仮契約を行うと、3人とも満足そうな顔を浮かべていた。

「……最も、イオンたちならばチェインと本契約できるゆえ、そっちのほうが出ることも多く、制約など少ないがな」

「何でそっちにしないの？」

ライダーからの純粹なつつこみに私は肩をすくめて答える。

「いきなり自分でも御しきれない力を与えられても暴走させるだけだ。それに仮契約の恩恵だけでも十分すぎるほどだ。ゆえに今はこれだけだ」

私は答えた後、全員に告げる。

「怪異討伐の作戦はこれで終了。撤収する」

「これ以上居ても得られるものは無いだろうからね。帰るとしようか」

教授も私に賛同したので、帰ろうとしたが……。

「……馬が4頭しか居ないね。どうする？」

教授が困った顔でそう問いかけた。

すると紫たちが答えた。

「私たちは別に宙に浮かべるから、飛んで付いていけば問題ないでしょ？」

「ええ。それに今ものすごく調子がいいから、どこまでも行けそうな気がするわ」

二人がそういったので、私たちは4頭の馬に、紫たちは街の近くまで飛行して戻った

……。





「……ということとは、私のお仲間さんですね!!」

日が傾き始めたころ、陳家に戻り、丁度戻っていた陳漢瑜たちに事の顛末を話すと、美鈴がうれしそうにそう結論付けた。

「ええ。もつとも彼の首輪付きだけど」

「……首輪つき……」

幽香がちよつと困り顔で言った言葉に、紫がなにやらハツとしたあと、少しだけ顔を赤くしながら反芻した。

これが本当に幻想郷の賢者になるのだろうか、と若干心配になりながら私は陳漢瑜に問いかけた。

「ということとでさらに2人分の部屋を用意してもらいたい。出来るかね?」

「ええ、構いません。それに、色々こちらに支援して頂けるようですから……」

彼女は妖艶な笑みを浮かべながらそうつぶやいた……。

ということ、後のフラワーマスターと幻想郷の賢者を仲間に出来た。

ただ、陳漢瑜と教授のタッグにより、予想よりかなり多い出費をすることになってしまったことだけが、今日の残念なところだろう……。

あと蛇足だが、紫も幽香も食事を思ったより気に入ったらしく、家計のエンゲル係数が若干心配になった。

宝物庫の食材が有限の可能性を考慮して、真面目に備蓄の確認をしなくては……。

## 出合いと別れ それは二つで一つ

翌日

正確に言えば東の空が白み始めたころ。

人の情事を覗き見していた八雲紫と幽香と共に夜遊びから戻ってきた。

するとそこには体を清めて服も着替え終えていたイオンたちがテーブルを囲んで談話していた。

「あ、お帰りなさい。あなた」

「お帰りなさいませ、旦那様」

「お帰りなさい、ラインハルトさん」

3人の笑顔とは裏腹に、少しだけ不機嫌そうにライダーとキャットが問いかけた。「マスターたちほったらかしにしてどこに遊び出たの?」

「しかもなにやらあちこち2人の服が乱れて、泣いた後がある。……襲ったのか?」

ライダーとキャットの問いかけに、3人が少しだけ動揺しながら私たちを見た。

2人は何故か泣いた形跡がある（と言うか今でも若干涙目な）上、服のあちこちが破けているので、そう思うのも無理はない。

ちなみに私は特に傷などはない。

「……夜の街怖い」

「……この人鬼畜過ぎる」

「「!?」」

完全に心が折れて、へたれモードの紫と、若干折れかかった幽香の発言に一同が問い詰めるような視線を向けてきた。

「……人の情事を覗き見した罰と私の暇つぶしをかねて夜の街で怪異と少し遊んだだけだ。——2人とも飛べなくして、スキマなどの能力を封じた状態だ。出なければ簡単に逃げられて罰にはならんからな」

「……明かり一つ持たされた状態で怪異だらけの夜の街に放り出されたときは、全然楽勝だと思ったのに……」

「私、絶対この人に逆らわない」

私の言葉に幽香、紫が補足した。

もつとも、紫の言葉は補足になっていないが。

「これに懲りたら、人の情事を覗き見しないことだ」

「……はい」

素直に頷いた2人を横目に、私は告げる。

「ああ、あとそろそろここを離れようと思つている」

私の言葉に美花が反応した。

「と言うことは洛陽に向かわれると言うことですか？」

「ああ。もつとも……」

私は西のほうを向きながら続けた。

「迎えが今日中に着く。ゆえにもし滞在を伸ばすとしても、迎えの気分次第になるだろうがな」

——\*——\*——\*

とりあえず紫たちの服も即席で作り、着替えさせたあと、食堂に向かうと……。そこには教授、陳漢瑜、陳元龍が既に着席していた。

「今日は美鈴君が料理を振舞つてくれるそうだ。なにやら彼女の闘志に火がついたようですね」

教授がそういった直後、厨房から繋がる扉が開き、美鈴が料理を運んできた。

「お待たせしました！ あ、皆さんの分ももちろん作っております！」  
そう言つて美鈴が食事の配膳を始める。

「急な話になるが、今日か明日にはここを発とうと思つている」  
「随分と急ではありませんか？」

陳漢瑜の問いかけに私は頷く。

「私もそう思つているが……」

私がそう言つた直後、玄関の方から声が聞こえた。

「すまないが教授。家の前に客人が来たようだ。迎えてくれるかね？」

「……ああ、構わないよ」

彼はそう言つて玄関の方へ向かつていった。

少しすると、教授と共に10歳前後と思われる黒髪ツインテの少女がやつてきた。

「結衣」

「お久しぶりです。まあ、貴方からすれば数日ぶりでしょうが。将臣……いえ、ラインハルトと呼ぶべきでしょうね」

少女——結衣——が私の言葉に反応していつも通りやや無愛想な態度でそう言った。

「ああ。それでいくつか確認したい」

「何なりとどうぞ」

「空に浮かべているあの飛行戦艦は何だ？」

私の言葉にイオン、キャスター、ライダー、キャット、教授が他の者と異なる反応を見せる。

「パンダグリユエルです。……暇つぶしで貴方があのゲームのデザインを元に引いた図面を元に作りました。もつとも、運動性能や居住性、耐久性を重視して特殊防御障壁、空間歪曲型光学迷彩の実装などのアレンジをしたので、対地攻撃性能がほぼゼロになりましたが」

「……卿はどこと戦争するつもりだ？」

私が顔をしかめながら問いかけると、彼女はため息をついた。

「別に戦争なんてしませんよ。巨大兵器が空に浮かぶ。そのロマンを私は自重せずに実現で来たのでやっただけです。現代では浮かべると高確率でどこかの国にばれましたので自重してたのです」

「巨大兵器狂いが自重しなくなった結果がアレか……」

私は西の方向を見た後、ため息をついて続けた。

「あと卿の拠点はどこだ？ まあ、それなり以上につきあいのある卿のことだ、私の目的地なのだろうか……」

「当然洛陽です。もつとも、アレ作ったのはもつと南西の山の中ですが」

そこでふと疑問が浮かぶ。

「……卿は一体いつからこの世界にいる？」

私の言葉に対し、結衣は少しだけ小悪魔的な笑みを浮かべた後、真面目な顔になった。「それは内緒です。……というか、そろそろ私に自己紹介させてください。皆さん置いてきぼりになってますし」

私はハツとして一同を見る。

完全に付いていけてなくて呆然としていた。

「自己紹介をさせてもらいます。私は南雲結衣。彼の正妻です」

「[[[:]]」

目を見開く一同に対し、イオンがさながら電球に明かりがついたような表情をする。

「ラインハルトさんが昔言っていた正妻さんですね!!」

「ええ。お久しぶりです。イオン。あと洛陽に戻ったら貴女と会いたがっている人がいますので、会ってあげてください」

「……私に合いたがっている人……？」

首を傾げるイオン。

それを横目に結衣が私に告げた。

「あ、あと貴方にも会わせたい人がいます。出てきて、沖田」



扉の方を向いて名前を呼ぶと、そこにかつて看取った若き天才剣士が出てきた。

「――」

私が驚いて言葉が出てこない中、彼女はあの時の笑顔で問いかけてきた。

「お久しぶりです、将臣さん。お互い一回死んでしまってますが、元気にしてましたか？」

「あ、ああ」

するとキヤットが沖田に対して問いかけた。

「そちらはアタシと同じ匂いがするが、もしかや同じ穴の貉か？」

「えっと、意味が分からないのですが……」

キヤットの問いかけに困惑する沖田。

「つまり玉藻の前のアルターエゴである彼女はこう言いたいのでしょう。『お前もアタシと同じ、前回の聖杯戦争で呼び出され、聖杯戦争終結宣言後、令呪の喪失と同時に受肉したサーヴァントなのだろう?』と」

「流石チート9割捨てて一人の男追っかけた女神。通訳が堪能すぎるのである。で、アンサーは?」

キヤットがそう言った後、沖田は頷いた。

「まあ、そうなりますね。……貴方やその胡散臭いおじいさんと同じで」

「……」

空気がやや剣呑なものになり始めたので、私はそれを止めるために一石投じた。

「まずは食事にしよう。……足りない分は私が追加で作る。あとで前回の聖杯戦争についていくつか聞きたいゆえ、当事者たちは可能な限り情報共有してくれ」

私がそう言うのと、誰かのお腹の音がなった。

「まあそうだね。美鈴君が作ってくれた食事が冷めてしまうのはもったいない。それに今日でここを君たちが経つとしても、まだ情報交換する時間はあるのだからね」

教授の言葉に、一同は頷いた……。

——\*——\*——\*

私が追加分の食事を用意している間に、双方の自己紹介が終わったのか、比較的穏やかに食事は進んだ。

イオンは主に結衣と先ほど拳がった飛行戦艦について、美鈴は紫と幽香と怪異あるあるを、キャスターは沖田と共に少々アレな話を、キャットが美花と教授、結衣と共に聖

杯戦争について情報交換などの話をしていた。

大体全員が食事を終えたころ。

「さて、私は紫たちがやらかした分の補填を教授の指定する倉庫に出してくる。……結衣、出立はいつになる？」

私の問いかけに、彼女は普通に答えた。

「いつでも出れますが、出来れば明後日の昼までには出立したいです」  
「では今日の夕方に出立しよう。各自支度などをしておいてくれ」

私がそう言うと、美花、キャットが片付けなどを始めた。

「幽香さん、食後の腹ごなしとして、お手合わせお願いします!!」

「……えっと」

美鈴にお願いされた幽香は困った表情でこちらを見た。

「結衣、万一暴走しても被害が出ないように結界を展開しておいてくれ」  
「了解」

私はそれを確認した後、教授を連れて部屋を後にした……。



「さて、ある程度情報がそろっただろう。卿の推測を可能な限り話してもらえるかね？」  
私は倉庫の中に指定された量よりも多めに資材を出した後、教授に告げた。

「……何から聞きたい？」

「1つは前回と今回の聖杯戦争の関係性。もう1つは今後の行動だ。卿はどのように振舞うか……だな」

「1つ目はともかく、2つ目は言わなくても分かると思うが？」

「一応な。卿はいずれ彼女たちと袂を別つのだろう？」

私がそういうと、彼はうなずく。

「ああ。だがしばらくは、彼女たちとの生活を楽しませてもらうさ。私が必要とされるまではね」

彼は悪役らしい笑みを浮かべてそう言った後、わざとらしいせきをしてつづけた。

「それでは1つ目について、私なりの考察を述べよう。まず聖杯そのものは十中八九同じ代物だ。これは、キャット君とメディア君、そしてブルーティカ君の反応、および私のクラスから、人理が一度焼却された可能性軸から持ちこまれたモノで間違いはないだろう。あと私と同じなら人類最後のマスターである彼女に呼び出されてからの記憶も引

き継いでいるハズだ。ただし、沖田君は彼女のマスターの縁でその可能性軸から引つ張られた可能性が高いがね」

「……」

私は無言で続きを促す。

「そして、聖杯は前回の聖杯戦争の始めと終わりまで管理している者が変わっている」

「何……?」

私が眉をひそめて問いかけると、彼は肩をすくめる。

「聖杯戦争終結を宣言したものが大聖杯と呼ばれるものを手に入れたのは間違いない。確か、南華老仙だったかな……? あと言えるのは大聖杯は最低でも3つの派閥、あるいはそれに相当する勢力で奪い合いをしているらしいということだけだ」

「それは第三者が情報をもたらしただけか?」

「ああ。筋肉隆々の自称乙女二人に教えられたよ。聖杯をもともと持っていた者たちは、君のように、外から来たもので、聖杯を奪ったのはこの世界の管理者……とかいう存在で、そのうちこの世界の破壊を是とした派閥らしい。もう一つはその乙女で、管理者だが世界の存続を是としている、とのことだ」

彼はそう言うのと、手を叩いた。

「私からは以上だ。あと喜雨君が珍しい植物を欲しがっていた。……できればジャガイ

モとかのイモ類、南瓜、トウモロコシあたりの食べられるモノの種を育て方と一緒に渡してくれると嬉しいね」

「善処しよう」

私はそう言つて、彼と共に倉庫を後にした……。

——\*——\*——\*

「将臣さん、将臣さん」

自室に戻つて宝物庫から出したソファアに座ると沖田が駆け寄つてきた。

見た限り、紫や幽香、結衣や沖田を含めた私と同行する者全員が部屋に居座っていた。そして沖田は私に身体を預けると、ふにやつとした笑顔を浮かべた。

「えへへ」

「……」

明らかに不機嫌そうないオンたち。

「まあ、今日は多めに見てください。なにしろ数百年ぶりの再会ですから。あと貴女たちは二日連続で彼に可愛がってもらったんでしょ？」

少しだけ怒った顔の結衣が布団に寝つ転がりながら指摘すると、3人は黙る。

「しかし大所帯になったわね」

「全部のちのハーレムメンバーなのだから大旦那様の好色と絶倫、後甲斐性はキャットにとつて筆舌がたいものだ。もつとも、アタシの手だと筆は使いづらいけどな。あと頭数だけなら、どつかの槍みたいな名前の主人公をはるかに上回るだろう」

ライダーの言葉に対し、さながら百面相のようにコロコロ表情を変えながら、そう結論付けたキャット。

「……」

「幽香、返事しなさい。……いくら負けたといつても、ここまでへこむ必要ないじゃない」

机に突っ伏している幽香と、その隣で声を掛けた後、ため息つく紫。

どうやら手合わせの結果幽香は美鈴に負けたらしい。

「む、そうだ。私は植物の種を私に陳元龍のところを持って行かなければ。すまぬが降りてくれ」

「……どうしてもですか？」

不満げな彼女に対し、私は耳元でささやいた。

「……………」

「分かりました。約束ですからね？」

「無論。私は約束は守る」

私がそう答えると、少しだけ名残惜しそうに私から降りた。

私はその後、即座に机を一つ取り出して、宝物庫から教授に頼まれていた植物を見繕う。

そのあと麻の中着袋にそれぞれ袋詰めして中着にタグを付けておく。

あとそれぞれの育成について注意点を羊皮紙に数枚ずつ書いて本として閉じ、それぞれのタイトルに加えて通常版、予備1、予備2と書く。

「…………相変わらず頭おかしい作業速度ですね」

結衣が呆れ顔でそう告げた。

「…………？ 私は陳元龍にこの植物の種を渡してくる。卿らは結衣の指示に従って荷物をまとめておいてくれ」

私はそういつて、部屋を後にした……。





ラインハルトさんが部屋を出た後、私は結衣さんに問いかけた。

「あの、結衣さん」

「どうしました？ イオン」

私と結衣さんのやり取りに、他の人たちからの視線も自然と集まった。

「あの人は、2人の人が融合した姿なんですよね？」

「……ええ。もつとも、外見……性格には外見の色としゃべり方などの行動のクセなどは黄金の獣と呼ばれた彼に引つ張られています。態度は基本的に将臣です」

「あ、外見はいまのあの人黒髪にして、後ろでまとめ、目の色黒にすると、大体将臣さんになりますね」

思い出すように沖田さんがつぶやいた。

「……両方とも、貴方たちの知っている人なのかしら？」

ライダーが問いかけると、結衣さんは少し困った顔で答える。

「ラインハルトのほうは、私が一方的にある程度知っている程度です。将臣のほうは私

が60年近く連れ添っているので性癖や特殊体質などもほぼ網羅しています」

「私は将臣さんしか知りません」

沖田さんはきりつとした顔でそう答える。

「……これが年齢詐欺と言うやつか」

キャットが真顔でそういうと、結衣さんは鼻で笑う。

「年齢なんて私たちにとつては飾りです。その上、外見も性別を含めて自由自在でもあります。……ただ、こつちのほうが何かと買物するときとかおまけつけてくれる人が

多いからこの姿をずっと維持し続けてたら、他の姿がしつくりこなくなっただけです」

「そういえば、私が病に伏せていたときにマスターさんたちと出会いましたが、マスター

さんはその姿でしたもんねー。まあ、そのときはおかつぱでしたけど」

沖田と呼ばれていた女の子が思い出すようにそういった。

ほのぼのとしてるな。

「……ところで、旦那様の性癖など、教えていただけませんか？」

と思つたら、美花さんがいきなりとんでもないことを言い出した。

「まず彼の性的欲求を刺激するには、一定以上の外見が求められます。これは外見が優れた人間ほど種として他より優れていることが多いからです。そうでなければ、相手にされません。まあ、私が見る限り、この部屋に居る全員問題ないでしょうが」

結衣さんはそういうと、ベッドから降りて、どこからともなく足のついたホワイトボードを出現させて、そこに色々書き始めた。

「あと、将臣は人と化外の混血のせいかな、人の心を一方的に読むことが出来ます。対策はあるにはありますが、それは横におきます」

『心が読める！』

と強調して書く結衣さん。

「そのため、言い寄る女性が、自分の金や富や権力目当てなのか見分けてしまいます。ラインハルトの言葉を借りるならば、『愛が足りん』相手は、交際できるかもしれませんが、彼が手を出すことはしません」

『愛が、足りんよりy獣』

再び強調して書く結衣さん。

すると、紫さんが挙手する。

それに気がついた結衣さんが、発言を促した。

「あの人、私たちには手は出さないって言っていたのだけれど……」

「基本自分からは手を出しません。ある特殊な状態になつていない限りは、こちらから言い寄るしか、彼と既成事実を作る方法はないといつてもいいです」

そういつていて、なにか思い出したのか、結衣さんがハツとした。

「あつ、彼が今手を出した人は、全員ここにいますよね？」  
するとキャスターさんが答えた。

「私が覚えている限り全員居ます。……私、美花さん、イオンちゃんの3人だけなので……」

「幾つか確認を。彼に抱かれていたときのことを思い出してください。彼の瞳は金色のままでしたか？」

かなり真剣な表情で結衣さんは問いかけをした。

「……？　金色のままでしたよ」

「はい。キャスター様の仰るとおりです」

「私も、おぼえてる限りだと金色のままだったよ」

キャスターさん、美花さん、私がそれぞれ答える。

「瞳の色なんて普通変わらないと思うけど？」

幽香さんがうなだれた状態のまま結衣さんに問いかけた。

「……まあ、とりあえず彼の瞳の色が赤だったら、夜一緒にいてはいけません。彼はそのとき、理性がほとんど吹っ飛んでるのと、体重ねたら、例え人間だろうと、神様だろうと、怪異だろうと、女性ならおめでた確実なので。あ、これは私や、私の式、および彼と関係を持った人たちからの情報ですから確実です」

すると、紫さんや、沖田さんが顔を真っ赤にする。

「どっかのファンタジーも真つ青な能力である。……逆に言えばそのとき以外はいくらしても不発ということになるが……」

キヤットがそういうと、結衣さんが一度入り口を見たあと、切り上げるように告げた。「とりあえず、あの人は人に抱かせる以外のことは、大体問題なく性癖を受け止めてくれる器が広い人です。から、ありのままをさらけ出してもだいじょうぶです。ちゃんと思いを告げれば、彼はその思いを受け止めてくれます。当たって砕けなさい」

彼女はそういうした後、付け加える。

「あ、そうだ。今後は夜の順番や、一度に突撃できる人数の上限などを私が設定します」

「[[:]]」

唐突な言葉に私たちは硬直した。

「理由としては3つほどあります。まずは流石に彼と言えど、一度に5人以上は相手できないという、物理的な理由。次に、可能な限り不平等感を出さないようにするため。最後に万一不満があってもその矛先が私に向くようにするためです」

そういうったあと、手をたたく。

「ということ、彼に突撃掛けたいなら、先に私に言ってくれとうれしいです。さて、女性の猥談はこの辺で切り上げましょう。彼が戻ってきますから」

そういつて彼女は出現させたときのようになまた唐突にホワイトボードを消し去り、部屋にいつの間にか増えていた本棚から一冊本を出して再びベッドにごろんと横たわった。

すると彼が部屋に戻ってきた。

「昼食の時間だ。卿らも来るといい」

彼はそういうと、部屋を後にする。

「……えっと、結衣様は……」

「？」

「嫉妬などなさらないのですか？」

美花さんの問いかけに、結衣さんが肩をすくめて答える。

「正直言えば、していますよ。彼が……将臣が本当に愛していたただ一人に對してですがね。正妻面していますが、彼からすればきつと私と貴方たちに大差はありません。あと嫉妬というのは、自分よりも何らかの面で上の相手にするものです。ですから、嫉妬の対象はその一人以外いません」

「……その相手の人って……」

キャスターさんが問いかけると、彼女は零すように答える。

「教えられません。彼と結婚する条件に、どんな拷問も記憶を覗く術を以つてしても暴

けないようにその情報に対してのみ強力な漏洩防止の術を掛けられました。無意識だ  
ろうと意識しても、それを他者に伝えることは出来ません。ただ……」

彼女は悲しそうに続けた。

「私が言えるのは、彼は彼女との思い出が秘したままであることを望んでいる。そして  
2人に訪れたのは悲しい結末だった。それだけです」

そう言い切ると、彼女は先ほどまでのふてぶてしい態度を見せる。

「さあ、何をしているのですか、早く昼食にしましょう」

——\*——\*——\*

昼食を食べ終えた後、私は部屋に出しておいた物を宝物庫にしまっていた。

が、何故か部屋に居た全員が本来キャットやライダー、紫たちが使っている部屋に  
行ってしまっており、1人だった。

「ラインハルトさん」

声を聞いて振り向くと、そこには陳元龍が居た。

「どうしたかね？」

「喜雨……」

「……それは卿の真名ではないかね？」

私が問いかけると、彼女は頷いた。

「昼食の後、森脇さんに貴方から渡された植物のことを聞いたんだ。こんな貴重な植物をくれたお礼をしたいけど、貴方はきつと何もかも持つてゐるって森脇さんに言われてモノでのお返しは諦めたんだ。代わりになるか分からないけどボクの信頼の証として真名を受け取って欲しくて……」

「そうか。では、ありがたく卿の真名を預かるとしよう。喜雨」

「……じゃ、じゃあね」

彼女はそういつて去っていった。

「……あのまま押し倒せばよかったのに」

ゆらりと近くの空気が揺らいで結衣が現れた。

「そうしたら卿は私を嬉々として折檻するだろう」

「まあそうですね。それにしても、農業一辺倒だった少女の心を揺さぶるのですから、さすが男版ビーストⅢ／Rですね」

「キアラ……」



私が思わずそうつぶやくと、結衣が呆れた様子で問いかけた。

「まったく、現代である人始末したことをまだ悔やんでるんですか?」

「否定はしない」

私の様子に思うところがあつたのか、ごまかすように告げた。

「それにしても、あの菌糸類はすごいですね。あの現代の世界における事実のほとんどをそのままゲームの設定として思いついたのですから。まあ、人理焼却はありませんでしたが」

「……行くぞ、結衣」

私は彼女の軽口を無視して、部屋を後にした……。

—\*—\*—\*

見送りということ、玄関にきてくれた喜雨たち。

「一般人に見られると色々面倒なので、ここで全員転移させます。お別れの挨拶があつ

たら早めにお願ひします」

結衣がそういうと、美鈴が号泣しながら紫と幽香に抱きついた。

「お別れなんてさびしいです。せつかく出来たお友達なのに……!!」

「大げさよ、貴女」

「別にこれが永遠の別れじゃないんだから。何か会ったら、彼女たちごと会いに来ればいいんだし」

幽香が若干うんざりし、紫が泣き虫な姉をなだめる出来た妹のように言葉を紡ぐ。

教授は私に握手しながら告げる。

「君が洛陽でどんなことをするか、私は楽しみに待っていていよう。もし私の力が必要になったのなら連絡をくれると良い。手が空いてたら、悪巧みのアドバイスくらいならしてあげよう」

「次に会うとき、卿が頼れる味方であることを祈っておこう」

「さて、それはどうかな？ 私はヴィランド。確かに正義の味を知ってはいるが、どう転ぶかは神のみぞ知る、だろう」

教授は素晴らしい終わると、一步下がる。

「貴方が下さった資材は、有効活用させてもらいますね」

「中抜きされぬように、信頼できる取引先を選ぶことだな」

「ええ、それはもちろんです」

陳漢瑜は私の言葉に満足したのか、話を切り上げた。

「えっと、ラインハルトさん」

「どうした、喜雨」

「あなたからもらった植物の種、大切に育てるからね」

私はそれを聞いて、少しうれしくなった。

「では、卿が育てた野菜を食べられるのを、心待ちにさせてもらおう」

「楽しみにしてて……」

私の言葉に対し、彼女は頬を緩ませてそういった。

「では、転移します」

彼女が指を鳴らすと、私たちの視界が白く染まった……。

視界が開けると、そこには鋼鉄の扉がそびえていた。

「ようこそ、私の空飛ぶ船へ、さあこちらへ」

結衣がそういうと、扉が開かれた。

そして彼女の後を着いていくと、鋼鉄の床と壁に、赤いカーペットやシャンデリア、

色々な調度品がやや不調和をかもしながら私たちの視界に映る。

幾つかの扉を開いて、その後しばらく歩く。

「まあ、私にデザインセンス求めるのは間違っているんで、あとでデザインセンスある人に内装はいじってもらおうとして……着きました」

これまでよりも一回り横幅が小さな扉を開くと、そこは船橋だった。

そして、艦長席以外は結衣の式が作ったと思われる人と寸分違わぬ式神たちがおり、船の操作をしていた。

私たちがそれに驚いていると、結衣がいつの間にか艦長席に座っていた。

「これより、洛陽に帰還する。速度は40ノット、防御障壁と空間歪曲型光学迷彩の展開はそのまま維持。余剰エネルギーは30%を切らないようにしつつ空調管理に回して」

「了解!!」

式神たちは息の揃った返事を行い、それぞれが計器や機器を操作し始める。

「とりあえず、手の空いた式たちに部屋を案内させます。明後日には着きますので、その間はご自由に。……ただし、今夜は私と沖田の邪魔はしないでくださいね?」

結衣は不敵な笑みを浮かべて、そういったのだった……。



夕食は各自の部屋に運ばれたシチューとパンを食べた（と思われる）。

そして食べ終えた後には月が夜空に浮かんでいた。

唯一つ残念なのは、娯楽の概念が薄い結衣が作っただけあつてか、娯楽になりそうなものがほとんどなかったことだろう。

そう思いながら部屋のシャワー室で身を清めていると、シャワー室の部屋が開く。

「お、お背中流しましょうか？」

「拒否権はもちろんありませんが」

前をバスタオルで隠しながら問いかける生まれたままの沖田と、結衣がやってきた。

「……卿が作った船だ。マスターキーくらい持つていてもおかしくはないな」

部屋の中からロックが掛けられるはずなのにどうしてと突っ込みそうになったが、船の製作者を思い出したため息混じりにそう告げた。

「で、では私たちが綺麗にしてあげますからね!!」

「数百年の研鑽がどんな物か、その身をもつて体験するといいです」

やる気を見せる沖田に対し、結衣は不敵な笑みを浮かべながら、そう告げたのだった



## 序章 白き御遣い

### 白き御遣い 華北に立つ

顔に降り注ぐ日差しが、夢の中のまどろみから俺の意識を現実に取り引きずり出した。ほとんど反射的に手で顔にかかる日光をさえぎりながら、目を開く。

「……アレ？」

俺の視界に広がるのは、見慣れている塗装された天井ではなく、歴史ある旅館のような板張りの天井だ。

その事実には首をかしげながら上半身を起こし、周囲を見渡す。

格子のつけられた窓、木製の机と本棚、壁、そしてベッドの寝具。

いずれも俺の知らないものばかり。

「一体どういうことなんだ……？」

すると、遠くから足音が近づいてきた。

このときパツと思いついた選択肢は3つほど。

一つは普通に起きておく。

もう一つはドアの死角に隠れ、扉を開けて入ってきた瞬間を狙う。  
最後の一つは狸寝入り、つまりは寝たふり。

——普通は一つ目でもいいはずだが……。

だんだん近づくと足音を聞いていると、不意に不安が湧き出た。

(普通に起きてるよりも、寝ているほうが、やってきた相手の対処がしやすいかもしれない)

俺はそう思い、寝たふりをするという選択肢を選んだ。

(呼吸を少し深めに、そして間隔を長めに……)

そう思いながら扉に背を向ける体勢で目をつぶっていると、扉が開く音がした。

「……まだ寝ているみたいですね」

声からして女性、あと予想だが、自分とそこまで歳に差がない気がする。

そう思っている、再び扉が開く音がした。

「輝理、御遣い様の様子は」

「まだ寝てるみたいですよ」

男の人、それも結構な御歳ではないかと思われる、ややしわがれた声に対し、女性の声がかたえた。

(……御遣い?)



俺の頭の中に浮かぶ疑問符。

「……………のう、輝理や」

「どうしました？」

なんか歯切れの悪い態度の男に対して、首をかしげるような女性の声。

「……………あの管輅の占いを教えた儂が言うのもあれなんじやが、本当にこの男が大陸に平和を齎す天より遣わされし、御遣いの片割れ『白き御使い様』何じやろうか？」

「だつて『輝く白き衣を纏いし白き御遣い』つて言われていましたし、こんな洋ふ……………衣を見たことありますか？」

『質問を質問で返すな』つて、じいちゃんがこの場に居たら突つ込みそう、などと思いつながら、俺は話の続きに意識を向ける。

「……………絹でも、流石にここまで綺麗に光る物はない。儂の知る限りではこんな衣見たことないわい」

「皇帝の財を管理する少府卿を務めたことのある秦様が見たことない衣なら、この大陸のどこを探してもきつと見つかりません。ならば、天の国で作られた物、と考えれば納得できるのでは？」

「……………しばらくは、様子見じゃな」

男がそういうと、一人分の足音がして、扉が開く音がした。

「僕は城に行つて来る。今日は休みにしておくから、その方を頼んだよ」  
「はい、行つてらっしゃいませ」

女性の言葉と共に、扉が閉められる音が聞こえた。

「……さて、そろそろ寝たふりをやめて起きてください。私が来た時点から、寝た振りしてるの、気が付いているので」

足音が聞こえなくなったころ、彼女は俺のほうに向かつて、そう告げた。

「……」

カマ掛けかと思つたのと、なんか指摘されて、じやつかん後ろめたさがあったことから、俺は行動が出来なかつた。

すると、近寄る気配と、寝台に自分以外の体重がかかる音が響く。

そして……。

「——!?!」

自分の耳にそーつと吹きかけられるどこか甘い香りの吐息。

予想外のことに俺は思わず体を反応させた。

「……さて、これで起きないのですたら、もう少し過激なことをしましょうか。まあ、御使い様がそういう趣味がおありなら、このまましても構いませんが……」

「……めんなさい。起きます」

これ以上寝たふりをしていると、何が起きるか分かった物ではなかったので、即座に返事をして、ほぼ同時に無理やり体を動かして、彼女のほうを向いた。

——さて、ここで問題だ。

耳に息を吹きかけることが出来る体勢の女性のほうに、寝転ぶように向いたら何が起きる？

答えは——。

「えっ」

「——!!」

俺の目の前に見えたのは、黒い服の上からでもわかる、とてもたわわに育った双丘です、本当にありがとうございました。

ハツとした様子の彼女が少し慌てて後ずさりしながら、自分の胸を腕でかばうように隠す。

「あ、その、そういうつもりじゃあ……」

俺が彼女の反応を見て慌ててそういうと、彼女もハツとする。

「す、すみません。しばらく本格的に体を洗っていませんので、不快なおいを感じさせてしまったかと思い、つい……」

彼女はそういった後、扉のほうを向いてなにやら一人でぶつぶつ言い出した。

「だ、大丈夫だよ。私汗臭くないよね……？　でもやっぱり……が……いい……」

そのあとため息をついて、少しすると、彼女はこちらに振り返った。

そこで改めて彼女を見ることが出来た。

身長は俺の頬くらいまでの、女性としては少し背が高い部類に入るだろう。

体格は出るところは出て、締まるところは締まっているモデル体系。

髪はやや紫っぽさがある黒に近い色で、肩にかからないくらいの長さ。

やや幼さのこる顔つきで、濃紺の瞳の左下に泣き黒子がある。

服装はチャイナドレスを参考にしような、少し変わった黒地の服だ。

「はじめまして、私は徐庶。字は元直といます」

「俺は、北郷一刀だ。一刀って呼んでくれ」

彼女の言葉を聞いて、俺は反射的に答える。

挨拶と自己紹介は大事と言われたことを思い出していると彼女が問いかけた。

「えっと、姓が北、名が郷、字が一刀で合っていますか？」

「……字？」

俺が聞きなれない言葉を鸚鵡返しすると、彼女がハツとした。

「あ、もしかして天の国では字がないのでしょうか」

「ちよっと待って。このまま話しているとなんか致命的な食い違いを起こしそうだ。ひ

とまず一つずつ互いに質問する形で良いかな？」

俺が提案すると、彼女は少し考えた後、頷いた。

「じゃあ、先がさつきしてた質問にこたえるね。君の名乗り方でいくと、姓が北郷、名が一刀になる。一刀つて呼んでくれ。字つてのはよく分からないから、教えてくれるかな？」

俺がそういうと、彼女は頷いた。

「字はまあ、名の代わりに名乗る自分でつけた名前です。真名はもちろん、名を勝手に変えることなんて言語道断ですからね。でも名で呼ばれたくないとかの理由がある人は、字を名乗ることで、真名を預けるまでは、字で呼んでもらえるという利点があります。ただし」

彼女は強調するように一度切つて間を空けた。

「このころ字かえるとかすると、なんて呼べばいいかとか混乱して、人が寄り付かなくなるので一度決めて名乗ったら、名乗り続けるのが基本です。なのでそれを考慮して字を考えない人もいますね」

「まあ、妥当だよな」

姓名をしょつちゆう変えてるやつ相手が友達に居ようものなら、会うたびに名前を確認する必要があるって、辟易してしまうだろう。

「えっと、では私が質問して良いですか？」

彼女がおずおずといった具合に問いかけてきたので、俺は質問を促した。

「私、秦さん……あ、これあの人の真名まななので、あの人に預けられるまで口にしては駄目ですよ。……気を取り直して。あの人には貴方を白き御遣いと言いましたが、本当に天の白き御遣い様なのでしょうか？」

「白き御遣いが何なのか分からないから、分からないけど、たぶん違うと思うよ」

俺が天の御使いとかいう仰々しいものだとは思えなかったもので、否定しておく。

「じゃあ、今度は俺の番だ。ここはどこで、今西暦何年なんだ？」

さつき彼女が名乗った名前が、記憶のどこかに引つかかると、この建物が現代の物とは思えなかったもので、とりあえず問いかけてみた。

「ここは華北にある冀州ギョウ近郊にある邑です。西暦というのは暦みたいですが、聞いたことが無いのでよく分かりません……」

「……」

俺は彼女の言葉を聞いて、自分の知識を総動員して仮説を導く。

（華北というのは、確か中国大陸の北のほうを指す言葉。でもそれなら、西暦を知らないのはおかしい）

それから首をかしげた。

(というか、中国ならなんで言葉が通じてるんだ?)

あるはずの言語の壁がないことに首をかしげていると、彼女が問いかけてきた。

「大丈夫ですか、一刀さん」

「あ、うん。大丈夫」

俺は一度思考を切り上げて彼女の質問に答えた。

「ではこちらから。貴方はどこから来たんですか?」

「日本の……って言っても、たぶん分らないと思う」

「……すみません。日本という国は聞いたことがありません」

申し訳なさそうに答える徐庶さん。

「で、では。一刀さん質問どうぞ」

「……えっと、真名<sup>まな</sup>って何? さっき言ってたけど」

俺が問いかけると、彼女は少しの間目を丸くした後、ハツとした。

「えっと、真名<sup>まな</sup>というのは、親、あるいは親代わりにつけてもらう大切な名前です。呼ぶことを許されてない相手の真名を呼ぼうものなら、その場で殺されても文句が言えないほど神聖な物です」

「思ったより物騒な代物だった!」

もしうっかり誰かの真名を呼んでいたら、俺はその時点で死んでいたかもしれない。

(その前に知ることが出来てよかった)

俺はそう思い、胸をなでおろした。

すると、彼女は補足をする。

「大抵は、信頼の証として、真名を呼ぶことを許すようになります。真名を預ける、とも言います。ただ、中には込み入った事情などから真名がなかったり、結婚した伴侶か両親以外教えられないという例も少なからずあります。ですので、真名が預けられないからといって、信頼されていないともいえません」

「へえ……」

俺はその言葉に頷きながら、答える。

その直後、どこからか、空腹を告げる音が響く。

「あつ、ごめんなさい。昨日の朝に見つけてから、水と羹あつもの以外貴方のおなかに入っていないの忘れてました」

ハツとしてそういうと、彼女は俺に告げた。

「今からご飯作って持つてきますから、少し待つててくださいね!!」

徐庶さんはそういつて、部屋を慌てて後にした。

「……えつと、俺は……?」

一人置いていかれた俺は、どうすればいいのかと本格的に頭を抱える。



「と、とりあえず分かる限りの情報をまとめよう」

俺はそういつて、復唱するように、知ったことを声に出す。

傍からみると馬鹿みたいだが、案外口に出すと考えが整理される……ような気がする  
ので、書く紙などがないときは、そうしている。

「ここはたぶん中国。でも西暦が通用しなかったのは奇妙だ。あと言葉が普通に通じて  
いた」

現代なら、大体西暦で通用するはず。

だが通用しなかった。

代わりに日本語は通じていた。  
俺の言葉

「……あと徐庶って、どっかで聞いたことがあるんだよな」

しばらく考えた後、俺は電球が灯されたようにひらめく。

「あ、思い出した。確か三国志で劉備の軍師を一時期やってて、孔明のこと教えた人だ」  
しかしその後俺は首をかしげた。

「あれ、でもたしか、その人男だったはず。それにもしあの人<sup>が</sup>本当に徐庶なら、俺はい  
ま、三国志の世界に居るってことになる」

ありえない、その一言をつぶやこうとして、俺は言葉をとめた。

「……俺を見てるのは誰だ？」

唐突に感じた空気の変化。

俺はその変化がもつとも大きかったほうを向いて問いかけた。

すると、壁際に『ソレ』は現れた。

まるで老若の判別がつかず、影絵のように造形をはつきりしない姿。

かろうじて認識できることは、暗い海のような色の長い髪と、ソレに近い色のぼろぼろのローブっぽいマントを羽織っていることだろうか。

「はじめまして、天の御遣い殿。私はカール・クラフト。しがない魔術師だ。少々理由があつて貴方の前に姿を現した。貴方が乱世を生き延びられるよう、手助けさせてもらう」

どこか芝居がかつて鬱陶しさを感じさせる声に少し困惑しながら、俺はその影に話しかけた。

「なんで俺なんだ？」

「貴方が天の御遣いであるから。そして私の目的に一番適している存在だから。この2つに尽きる」

「……アンタが胡散臭すぎて信用できないんだが」

俺がそういうと、影は笑つた後答える。

「無論、私の言葉に耳を傾けないというのも一つの選択肢だ。ただし、それによって不利

益を被ったとしても責任は持てないがね」

「……」

俺が黙り込むと、影が謳うように語りだした。

「では、まず今御遣い殿が置かれている状況を語るとしよう。この世界はどのような世界なのかも含めてね」

「!!」

俺が目線向けると、そのまま続きが始まる。

「この世界は外史といって、「もしも」の可能性が具現化した世界だ。この世界は『もしも三国志に出てきた人物が軒並み女の子だったら?』という可能性が具現化した世界だ」

「……ありえない」

俺がそう零すと、影は告げた。

「ならば彼女が戻った後に頼むと言い、『何でも良いから本を見せてくれ』と。そして今の君主は誰か、国の名前は何か、と問いかければよい。前者は漢字のみの文章の本が手渡され、後者は劉宏、国の名は漢という答えが返ってくるだけだ」

影はそういうと、揺らめいて消えてしまった。

しかし、気配は残ったまま。

そして別れの挨拶とばかりに声が響く。

『必要になったら呼ぶと良い。私が必要なときは姿を見せよう……』

その言葉とともに、気配は消え去った。

「……」

俺が影の消え去った場所を見てみると、扉が開く。

「ご飯できましたよ。一刀さん」

徐庶がそういつて部屋机の上に料理を置いてくれた。

「……悪いんだけど、徐庶さん」

「別にさん付けは必要ないですよ？」

首をかしげる彼女に対して、俺は若干不安になりながら問いかけた。

「じゃあ、徐庶。2つ質問と、一つお願いがある」

「出来る範囲なら答えますし、お願いも聞きます。何ですか？」

何故かおてんばな弟を見る目で見られている気がするが、俺はそれを無視して問いかけた。

「この国の名と、誰が今君主なのか。質問はこの二つだ。お願いは特に指定しないから、何か適当な本とか見せて欲しい」

「この国の名前は漢。君主様は皇帝であらせられる劉宏様です。あ、本は少し探してき

ますので、椅子に座ってご飯食べててください」

そういった後、彼女は部屋を去っていった。

「……」

俺はとりあえず出された食事を見る。

「粥と……豚汁っぽいやつか」

俺はレンゲと手に取り粥を一口。

「薄味だけど、なんかホツとするな」

そして箸に持ち替えて豚汁もどきを一口。

「……おいしいといえばおいしいけど……」

これじゃないかと思ってしまうあと、出された食事にけちをつけた自分に自己嫌悪する。

そのあと、食事が続いていると、左手の甲になにかが付いているのが目に入った。

「……？」

おれがそつとそれを見ると、赤い色の紋章みたいなものが俺の左手の甲に浮かび上がっていた。

「な、何だこれ……？」

角度を変えてみてみるが、それが何なのかまったく分からない。

そこでふと、先ほどの『影』を思い出す。

「……あいつなら、分かるかもしれないが……」

今呼んでも姿を現すとは思えなかったのでやめた。

そう思っていると、徐庶さんが部屋に戻ってきた。

「えっと、私を持っている本は、私が好きだった母の作ってくれたこの本だけなんです

……。これでも良いでしょうか……？」

そういつて彼女が差し出したのは、何度も読まれたのか表紙の端などがすこし破れている本だった。

「大丈夫、ちよつと確認したいことがあったから」

俺はそういつてそーつとその本を受け取り、開く。

(……あの影の言葉はどうやら正しいみたいだな)

漢字のみの文章と、たまに挟まれる挿絵を見ながらそう結論付けた。

俺はそつと閉じて、割れ物を扱うようにそつと本を返した。

「ありがとう。知りたかったことを確認できたよ。俺文字読めないらしいつてことも」

「えつと……」

俺の声のトーンが急に変わったことにオロオロする徐庶さん。

そして何を血迷ったか、俺の手をとつて彼女が告げた。

「だ、大丈夫です。私が教えます!!」

「あ、ありがとう……?」

唐突な発言に俺は思わず疑問系でお礼を言った。

その後、俺の手を離れた彼女が思い出すように告げた。

「あ、一乃さん。好きなのはこの屋敷に滞在してくださいって構いませんからね」  
「えっ?」

俺が思わず問い返すと、彼女が目丸くして問いかけた。

「……もしかして私の食事では質素すぎました?」

「い、いや。そんなことは無い! だけど、俺何も返せる物が無い……」

俺がそういうと、彼女は優しい微笑を浮かべて答える。

「別に無理に何かを今すぐ返そうとしなくて良いんです。今は鳥が餌を食べ、空へ羽ばたくための力を蓄えるように、出来ること、やりたいことを見つけてください」

「……なんで、俺にそこまで……?」

俺がやや面食らいながら問いかけると、彼女は少しだけ悪戯つ子のような笑みを浮かべる。

「私、人を見る目はあるんです。どれだけうまく取り繕ったってその人の本質を一目見ればすぐに分かるくらいには。……貴方は道を外さなければ大成する、そう私は判断し

ました。なので、その始めの一步を助けてみようかなって思いました」

「……やさしいんだね」

俺がそういうと、きよとんとしたあと、口元をかすかに吊り上げながら彼女は答えた。「さて、それはどうでしょうか。もしかしたら白き御遣い様をうまく使って何かをしようとする悪女かもしれませんし、大成したときに貸しを返せといつてふんだくる小悪党かもしれません」

「じゃあ、そういうことにしておくよ。……とりあえず、しばらくはよろしくね」

俺がそういうと、彼女は笑顔で答えた。

「ええ、よろしくお願ひします」

— \* — \* — \*

その後、簡単に家の中を案内された。

そのときに、俺はまるで数ヶ月運動していない人みたいに体がガタガタであることが



発覚し、同時に倒れた。

そしてあろうことかお姫様抱っこされて部屋に連行された。

色々なシヨックで悶絶しているところに昼食を振舞われ、気分転換代わりに文字の勉強をしていたが……。

「輝理、おるか？」

ノックもなしに扉が開いたおかげでびっくりして書いていた文字がのたくってしまった。

幸か不幸かそれに徐庶は触れずに男の声に反応した。

「あ、秦様。私はここに居ますよ」

「ちよつと困ったことになった。太守がまた蒸発したらしい」

「またですか？　だから中央から派遣された人は信用できないんですよ」

呆れたようにそう返す徐庶さん。

俺は一度振り返る。

そこに居たのは老人といっても差し支えなさそうな、白い髭をたくわえた男だった。

「えつと、徐庶さん。今の会話の意味がよく分からなかったのですが……」

俺が問いかけると、老人が一瞬徐庶さんを見る。

それに徐庶さんが目線を合わせたあと、俺の問いかけに答えた。

「えっと、太守というのは、この郡を治める人で、蒸発というのは、文字通り蒸発したように居なくなつてしまつたことをさします。まあ、理由はなんとなく分かりますが……聞かないでください」

「アツハイ」

俺は厄ネタに感じたので素直に頷いておいた。

すると老人が口を開いた。

「輝理、そちらの方は……」

「白き御遣い様です。北郷さん、自己紹介をお願いします」

徐庶さんに促されたので、俺は挨拶する。

「姓を北郷、名を一刀と言います。できれば、北郷、または一刀と呼んでいただけると、ありがたいです」

「これはこれ。俺は陳琳。村の役人をやっている老いぼれですじゃ」

互いに自己紹介が終わると、陳琳さんと徐庶さんが話し始める。

「御遣い様はしばらく私が世話をしていますか？」

「俺は別に構わんが……」

一度こちらを（たぶん正確には机の上を）見てから、陳琳さんは問いかけた。

「みたところ、文字を書いているようじゃが、何を書いておるんじゃ？」

「えつと……」

徐庶さんが言いよどんでいるので、俺が答えた。

「この大陸の文字がまだしつかり読み書きできないので、徐庶さんに教えてもらつてたんです」

すると陳琳さんがほう、と零した後続けた。

「自分の出来ないことを認めて、出来るように努力する。なかなか出来ないことをするのは流石は白き御遣い殿ですな」

そういった後、陳琳さんが少し困った顔をする。

「ところで輝理さんや。もうそろそろ夕食の時間なんじやが、何か作ってもらえるとありがたいのう」

「えつ、あつ、嘘!!」

夕暮れ時になっている窓の外を見て、ハツとする徐庶さん。

「二刀さん、ごめんなさい。今からご飯作つてきます。勉強の続きはまた明日ということ!!」

そういつて彼女は全力で部屋を後にした。

「……御使い殿」

「は、はこ」

陳琳さんがただならぬ雰囲気で声をかけてきたせい、少し上ずった声で返事した。

「儂に何か合つたら、儂に代わつてあの子を頼んでもよいか？」

「えっ」

俺が驚きながら問いかけると、陳琳さんは笑つた。

「冗談じゃよ。いくら白き御使い様じゃろうと、初対面の相手に親友の孫娘を託すつもりはないわい」

「……ん？ 親友の孫娘？」

俺が引つかかつた言葉を反芻すると、陳琳さんが頷いた。

「人に歴史ありといひましてな、色々あつただけ言わせてもらいますぞ。それゆえ、あの子はわしにとつても孫娘みたいなもんですじゃ。ただ……」

「ただ……？」

俺が問いかけるも、陳琳さんは首を振る。

「年寄りの世迷言ですじゃ。忘れてください」

そういつた後、陳琳さんは部屋を出ようとする。

が、一度手を止めてから、少し悩むそぶりを見せてから、こちらを向いた。

「では、御遣い殿。儂はこれで失礼させてもらいますぞ」

そういつて陳琳さんは去つていつた。

「……………??」

俺は首を傾げるしかなかった……………。

このあと、徐庶さんがやってきて、用意してくれたご飯を2回おかわりした。

あとお風呂（と、明かり）が貴重な物であることを知って、カルチャーショックを受けたのはここだけの話。

寝台に横になる俺は、暗くてよく見えない天井を見つめながら、ため息をつく。

（……………ここはあの『影』のいうとおりの世界なのかもしれない）

もしそうなら、どうしようか悩むが、答えは出ない。

（とりあえず、夜は早く寝ておこう。基本みんな日が沈むと寝るらしいし）

俺はだんだん重たくなるまぶたに抗えず、目を閉じた。

どうするのかとかは、……………明日……………考え……………よう……………。